

【講演記録】 日ソ国交回復時の731部隊柄沢十三夫と近衛文隆の抑留死*

ゾルゲ事件からシベリア抑留へ

一橋大学名誉教授、早稲田大学客員教授 加藤哲郎

1 はじめに—「戦争の記憶」と情報戦

これから「戦争の記憶」について、ゾルゲ事件、731部隊、シベリア抑留という、それぞれに異なる三つの主題を研究してきて、それらが重なり合った接点での話をさせていただきます。

《歴史の記憶は、諸個人の体験・証言とともに、時々の情報戦で作られる。例えば敗戦直後に反戦・反ファシズムの物語とされていたゾルゲ事件は、東西冷戦の開始とともに「国際赤色スパイ団」の犯罪とされた。冷戦終焉で現れた、旧ソ連秘密文書やアメリカ国立公文書館資料で調べていくと、一見無関係なゾルゲ事件と関東軍 731 部隊の細菌戦・人体実験、さらには日本人60万人のシベリア抑留、あるいは 1956 年日ソ国交回復時の近衛文麿元首相長男・近衛文隆の抑留死に至るまで、虚実を取り混ぜた、日本、アメリカ、ロシア（旧ソ連）、中国等々から発信される国際情報戦が見えてくる》というのが、今日の話のあらすじです。

「DO YOU KNOW?」という右上の写真は、2013 年 5 月 12 日のものです。東日本大震災で、松島空港が津波で完全に壊されて、自衛隊の飛行機も九州に退避していたのですけれど、それがようやく松島空港の復興がなって、ブルーインパルスという自衛隊のアクロバット航空隊が松島に戻ったときに、安倍晋三首相

がその基地で自衛隊員を励まして、その際に、パイロット服を着て、親指を立てて、復興を祝っている写真です。

日本の新聞ではそのように書かれていますけれど



も、これについて、すぐにアメリカの記者が噛みつきました。

何かと言うと、実は安倍首相ではないのです。ポイントは、その下の飛行機のナンバー、要するに、

「731」という飛行機に乗って、首相がニコツとしてるのは、「これは何事だ」というのです。

何故かと言うと、第二次世界大戦で「マルタ」という隠語で呼ばれたのですけれども、日本軍に敵対しているとみなされた中国人・ロシア人・朝鮮人、あるいはモンゴル人等々を、平房というのですが、ハルビン郊外の大きな細菌戦実験工場に連れ込んで、そこで人体実験を行い、さらに、そこで培養されたペスト菌、コレラ菌等々の爆弾を、実際に中国大陸でばら撒いた。それが、いわゆる「731 部隊」で、「その 731 部隊を連想させるような機体番号の自衛隊機に、日本の首相が乗っているとは何たることだ」というのです。

アメリカの「ネルソン・レポート」によりますと、

*お断り：この講演記録は、昨 2015 年秋以降に、筆者が新三木会、日本ユーラシア研究所、第 9 回ゾルゲ事件シドニー国際シンポジウム、早稲田大学 20 世紀メディア研究所などで行った、それぞれに主題や重点の異なる講演の集大成である。与えられた時間が一番長かった 2015 年 10 月 15 日の如水会館・新三木会の講演「歴史の記憶—ゾルゲ事件、731 部隊、シベリア抑留」のテープ起こし記録原稿を底本として、私のホームページ「ネチズンカレッジ」に公開したものを、その後の講演での事実関係の訂正、論点深化を経て、2016 年 1 月 30 日の早稲田大学 20 世紀メディア研究所第 100 回研究会報告「シベリア抑留とプリンス近衛文隆の死—『異国の丘』『夢顔さん』の実像」を重ね合わせて修正した、活字による決定版である。本誌公刊と共に、「ネチズンカレッジ」版も更新され、公開される。

これは、丁度ドイツの首相がふざけてナチス親衛隊 (SS) の制服を着て登場するようなものであって、人々に、とくにその被害を受けた国々の人々に大きな心の痛みを与えるものである。こういう論評が出ました。そのことを、韓国の新聞『中央日報』が引用して、日本語で WEB 上で報じたものです。「日本のメディアはこのことについて報じていない」ことも、問題にしています。

2 ゾルゲ事件と731部隊の接点

ユネスコ歴史遺産をめぐる情報戦

2015 年秋、ユネスコ (国際連合教育科学文化機関) の世界記憶遺産に中国の提出した南京事件が認められて、日本政府は「ユネスコの分担金を出さない」とまで言いだしました。あれは、メモリー・オブ・ザ・ワールド、つまり「世界の記憶」というシリーズで、ユネスコ記憶遺産と呼ばれるものです。別にその犠牲者が30万人か、2万人かという人数を問題にするものではありません。登録名は Nanjing Massacre で「南京虐殺」ですが、当時書かれた被害者の日記とか証言とかが歴史的な記憶遺産としてまとめられたものです。

日本では、三池炭鉱の山本作兵衛の記録画なども、ユネスコ記憶遺産に指定されています。それに対して、日本政府は、南京での被害者の数をとくに問題にして、「政治的利用だ」と言っているのですけれども、ユネスコ世界遺産に認定された、明治日本の産業革命遺産に首相の出身地山口の松下村塾まで入れられたというのも、ある意味で政治的です。この時は、朝鮮人の強制連行によって作られた施設についてその説明がないと、韓国政府がクレームをつけました。

南京大虐殺と一緒に、日本人のシベリア抑留の記録も認められ、「舞鶴への生還— 1945 ~ 1956 シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録—」として登録されました。これに対しては、ロシア政府が公式にクレームをつけましたが、国際機関であるユネスコは受け付けませんでした。このシベリア抑留の記録は、人類史にとっての共有財産として残されます。

中国側からは、731 部隊の跡地が現在記念館になっており、ユネスコ世界遺産としての申請がすでに準備されており、登録される可能性があります。

つまり、20世紀東アジアの歴史認識に関わる世界遺産として問題になるのは、第一が今回の南京事件ですけれども、おそらく次は、従軍慰安婦問題でしょう。従軍慰安婦問題は、日本と韓国の間で主として問題になってきて、2015 年末の日韓外相合意で、韓国政府は記憶遺産申請を取り下げるとしていますが、少女像の撤去等、被害者である韓国の側には根強い反対と不信があり、大統領が変わったりすれば、今後再申請される可能性があります。

そればかりでなく、最近中国では、中国大陸においても日本軍は慰安所を作って、中国人女性を虐げていたという記録や証言が、いっぱい見つかっています。それを、場合によっては韓国と共同で、ユネスコ記憶遺産に申請する可能性があるわけです。

そして、三番目にやって来る歴史遺産、記憶の争点、731 部隊の問題です。

731 部隊の細菌戦・人体実験の問題は、1981 年に出的森村誠一の『悪魔の飽食』という本で知られるようになり、ベストセラーになりました。それ以来、いろいろな研究が進んでいます。

731部隊の米ソの記憶と中国側新資料

大体、冷戦崩壊までの記録というのは、アメリカ軍が 731 部隊の関係者、とくに医学者・医師たちから実験データをとって、それによって極東国際軍事裁判 (東京裁判) の免責、つまりデータを提供したから、その代わりに訴追しない形にしたという話が、アメリカ側の細菌戦記録から出てきました。

それに対して、ソ連の側は、1949 年 12 月ですけれども、「いや、あれは明白な戦争犯罪だ」ということで、極東シベリアのハバロフスク裁判がありました。そのとき、シベリアに抑留した60万人の日本人の中から 731 部隊の関係者、とくに確証のある12人の被告を選び出して、その人たちを戦争犯罪人として法廷に立たせ、当時の日本軍が、ジュネーブ協定で禁止されて

いた生物化学兵器、毒ガスと共に禁止されていた細菌戦を行ったとして告発したのです。しかも、人体実験を行ったということで、ソ連独自の裁判を進め、12人が有罪になって、山田乙三関東軍総司令官以下被告達に禁固（矯正労働）10年から25年ぐらいの罪が着せられました。

ソ連側から731部隊の裁判記録が出されて、その時期にそれをもとにした山田清三郎さんの小説とか、高杉晋吾さんのルポルタージュとかが出た。冷戦時代は、米ソの資料に基づいて、731部隊についての情報戦がなされてきました。

とくに米国側は、ハバロフスク裁判について、「ソ連の裁判はでっち上げで、信用できない」と、黙殺する態度をとりましたので、両方の主張が並行していました。

しかし、研究が本当に進んできたのは、冷戦崩壊から21世紀に入ってからです。もともと最大の被害者である中国の人たちが、証言や物的証拠を集めるようになり、それに基づいて日本に対する国家賠償請求の裁判を起こしました。つまり、米ソが731を政治的に利用しようと争い合っていた段階から、本来の被害者といえますか、中国の人達が声を出し始めたために、全く新しい731部隊研究の局面が生まれています。

私のゾルゲ事件研究の基調も、「冷戦時代と今はこんなに違う」ということでしたが、731部隊についても、冷戦が崩壊して、関係する新事実がいっぱい明らかになっているのです。このことを中心に、それに関連したいろいろな問題を、エピソードを交えてお話します。

多磨墓地のゾルゲの墓と731供養塔

これはゾルゲ事件研究と731研究が偶然に結びついた話ですが、ゾルゲ・尾崎秀実が死刑に処されたのは1944年11月7日で、毎年11月7日前後には、ロシア大使館の関係者を含めて墓前祭が行われています。

ゾルゲ・尾崎達のお墓のそばに、「懇心平等万霊供養塔」と多磨墓地の記録には書いてあるのですが、表には何も書いていない石塔があるのです。これが実は、

731部隊の隊員および犠牲者供養塔で、多磨墓地の記録には、英語でUnit 731 Memorialと書いてあります。

これが何故か、わりと近くにあるのです。この二つのお墓、ゾルゲの墓とこの懇心平等万霊供養塔はどう

いうふうにしてできたかを調べていきますと、

「ふたき・ひでお」と読むのですが、「二木秀雄」という731の元隊員がでてきます。731

部隊の供養塔は、医師の二木秀雄が私財を投じて、1956年に146万円ですから相当の額ですけれど、それに有志がさらに5万円出して作ったメモリアルなのです。本人の墓も近く

にある。この二木秀雄という人物は何者かを調べていくと、興味深い話になるのです。

きっかけは、最近、占領期のカストリ雑誌に興味があって、いろいろ集めたことに始まります。『真相』とか『政界ジープ』とか『レポート』、『旋風』などいろいろあります。その一つである右派の『政界ジープ』という雑誌が、「尾崎・ゾルゲ赤色スパイ事件の真相」というタイトルの記事を、1948年10月号で特集しました。二木秀雄は、その編集長・発行人でジープ社社長です。

今の我々は、「ゾルゲ事件はスパイ事件だ」と知っていますから、何でもないことですけれども、実は、尾崎秀実・ゾルゲが、太平洋戦争が始まる直前



にやった行動を「スパイ事件」とか「赤色スパイ事件」と呼んだのは、この雑誌が初めてのものです。

反戦平和の闘士からソ連の赤色スパイへ

しかし、ゾルゲ事件はその前から知られていたのではないかと思われるかもしれません。それは、尾崎秀実の『愛情は降る星の如く』という獄中で書いた家族への手紙が、戦後ベストセラーになって、尾崎とゾルゲは、それまで「反ファシズム・反戦平和の闘士、戦争が始まる直前まで日本で戦争に反対する人がいた」という風に、戦後の民主化の時期には高く評価されていたのです。「尾崎こそが、真の愛国者だった」「ゾルゲ事件は反戦活動だった」、こういう論調が、実は1948年秋にこの『政界ジープ』が出るまでは、日本での支配的評価なのです。

事実、占領期の出版物を網羅した米国のプランゲ文庫で調べても、「スパイ事件」と名付けた本や記事は、この雑誌が出るまでありませんでした。

この3ヵ月後、49年2月に、米国陸軍省のゾルゲ事件についての公式報告書が出ます。これが「ウィロビー報告」と呼ばれるものです。当時のGHQ/G2（連合国軍最高司令官総司令部／諜報部）のウィロビー将



軍が作った公式記録で、これがレッド・スパイリンク、つまり「赤色スパイ団」の告発になっていまして、それで「ゾルゲ事件というのはソ連のスパイ事件だったのだ」と、日本でも広く知られるようになるわけです。

二木秀雄の『政界ジープ』特集号は、その3ヵ月前に出て、当時は目立たなかったのですが、ウィロビー報告が出ることによって、「ああ、そうだったのか」となった、いわば、先駆けのスクープ記事だったのです。当時はGHQ/CDD（民間検閲局）の検閲がありますから、実際には、G2のCIS（民間情報局）あたりがリークした情報を、G2に取り入れた右派大衆政治

誌『政界ジープ』が報じたものでしょう。

ゾルゲの墓を建てた石井花子の証言

この『政界ジープ』の特集記事を、リヒアルト・ゾルゲの東京時代の愛人と言われる石井花子という女性、銀座のバーの女給だった女性ですけれども、彼女が、ゾルゲの墓を建てるとききっかけになった、と証言しています。

曰く、昭和23（1948）年10月頃に『政界ジープ』という雑誌に「尾崎ゾルゲ赤色スパイ事件の真相」という記事が出たので、びっくりして、それまでいろいろゾルゲ事件について調べ、とくにゾルゲの遺骨がどうなったかを知ろうと思ったけれど、知ることができなかった。それが、この記事の中に、ゾルゲの遺体が雑司ヶ谷の共同墓地にあると書いてあったので、雑司ヶ谷に通って、守衛さんと仲良くなって、ようやく土葬された体格のいい外国人の遺骨が出てきたので、これがゾルゲの骨だということが分かった、と。

つまり、多磨墓地のリヒアルト・ゾルゲの墓という



のは、石井花子が建てた墓です。ゾルゲの遺骨がどこにあるかがわかり、墓をたてるきっかけになったのが、この『政界ジープ』1948年10月号特集記事だったと、述べているのです。

日本でのゾルゲ事件の報道・見方は、そこで大きく変わります。今日まで続く、米国陸軍省公式報告、ウィロビー報告の「赤色スパイ事件」が、支配的な見方になったのです。けれどもそれは、史実に照らしてどれだけ



本当なのだろうか、いろいろ検討したのが、『ゾルゲ事件 —— 覆された神話』という、私の平凡社新書（2014年）です。

冷戦後に明らかになったゾルゲ事件

ゾルゲ事件については、とくに冷戦が終わってから、ソ連側と米国側から、新しい資料が膨大に出てきました。白井久也・渡部富哉さんらの日露歴史研究センターの機関誌『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』が45号出ていますが、それらを見ていくと、いろいろほかのことも分かってくる。

GHQ/G2のウィロビー報告は、『上海における陰謀』という英文書物の原タイトルの通り、もともと日本よりも、中国が本来の対象だったものです。アグネス・スメドレー、エドガー・スノーら中国共産党に近い在中米国人ジャーナリストを、非米活動として告発するために、ゾルゲ事件を利用したものです。

ソ連は、1964年に初めて「ゾルゲは、実は、我が国の赤軍の諜報員であった」と認め、しかも一足飛びに「ソ連邦英雄」にしました。冷戦の時期、キューバ危機のすぐあとで「ゾルゲみみたいな諜報活動が今こそ必要だ」というモデルに仕立て上げる。それまでは、リヒアルト・ゾルゲの存在そのものを、ソ連政府は否定していたのです。

だから、1964年までは、米国が一方的にゾルゲ情報を流し、「ソ連は、日本政府の中枢にスパイを送りこんだ。そうしたスパイは、恐らく米国にもいる、当時の世界中どこにでもいただろう」という、反共情報宣伝をやっていたわけです。

731の供養塔をたてた二木秀雄

このつながりでは、『政界ジープ』の社主である二木秀雄、731部隊の供養塔「懇心平等万霊供養塔」を建てた人物が重要です。ゾルゲの墓は石井花子ですが、731供養塔を建てた二木秀雄という人物は、731部隊の隠蔽・免責・復権に重要な役割を果たしたことが、分かってきました。

端的に言えば、初めの第一段階は、731部隊の存在

を抹消し隠蔽する。つまり、一切何もなかったように証拠を隠滅するための作業、ハルビン近郊平房の実験棟の爆破や、人体実験用「マルタ」の殺害、資料の焼却などの第一線にいました。731部隊員は、1945年8月9日にソ連軍が満州に攻め込んだときに、すぐに特別列車を仕立て、いち早く日本に逃走しました。8・15（終戦の日）以前に、既に満州を離れていたわけです。名簿と貴重なデータ・資材は、持ち帰られました。

その幹部たちが、1945年8-9月、どこに集まったかということ、石川県の金沢です。金沢は、石井四郎が四高出身で縁があり、二木秀雄も四高・金澤医大卒で出身地です。有名な隊員では、病理解剖学の石川太刀雄が金澤医大（後の金沢大医学部）教授で解剖データを持ち帰っていました。そこに仮本部が置かれて、隠蔽・口止め工作がなされたのです。二木は、後に幹部たちの同窓会である戦友会「精魂会」を立ち上げますが、731部隊隊員の名簿管理人であったようです。

その後45年10月ぐらいから、米軍は、日本は戦時中に細菌戦をやっていたらしいと分かって、その関係者を尋問し始める。そこから第二段階の免責工作が始まります。つまり、中国大陸でマルタを使った人体実験をやったこと、ペスト蚤を実際に撒いて細菌戦を実行したこと、この二つのこと以外は、米軍にむしろ積極的に供述して、俺達は純粋な科学研究・医学研究をやったのだといえ、という指令が石井四郎中將から出される。そして、731部隊と米軍細菌戦調査団の折衝が行われる。この過程にも、この二木秀雄という人物が関わっている。



それから、1947年の末に極東国際軍事裁判（東京裁判）で、もう731部隊は戦犯に訴追しないと決まる。そこから第三段階の復権となります。つまり、データを提供したから不訴追・免責にすると決まった段階以降は、今度は医学界の中で、731に関係した医者達が、国立大学医学部長とか日本学術会議会員とか、どんどん偉くなって復権していく第三段階の過程があるわけです。そこでもこの二木という男が一役買って、関係している。

しかし、1956年春に、『政界ジープ』誌の編集長・社主であった二木秀雄が、戦後最大の恐喝事件、7000



万円ほどを不当に得た「政界ジープ事件」を起こす。大会社に「お前の会社のスキャンダルを雑誌に出すぞ」といって金をとる、後の総会屋

のやり方です。これをこの雑誌がやっていたということで捕まり、二木も主犯として、最終的には懲役3年ですが、有罪になって表舞台から消えていく。雑誌も廃刊になる。

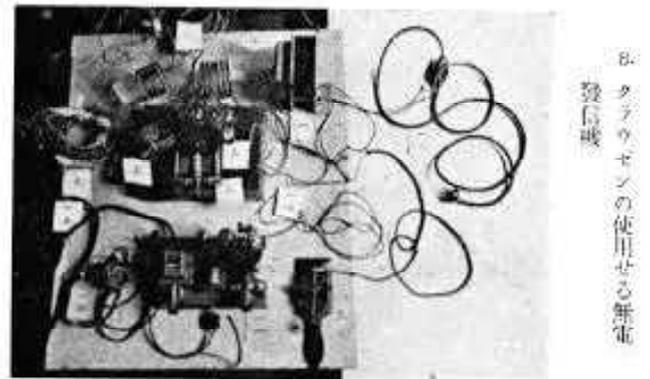
しかし、その間に731部隊の関係者は、医学界・医師会、厚生省その他で復権していくプロセスがあったわけです。その関係は詳しく言うといろいろ面白いのですが、これは2015年3月に早稲田大学20世紀メディア研究所で一度講演し、その時のパワーポイント原稿「731部隊二木秀雄の免責と復権―占領期『輿論』『政界ジープ』『医学のとびら』誌から」を、私の個人ホームページ「ネチズンカレッジ」に公開していますので、ここではごく簡単にお話します。

マックス・クラウゼンの尋問記録

そういうことが分かってきたので、ゾルゲ事件と731部隊がどこかでつながるのではないかと考えて出てきたのが、次の裁判記録です。

マックス・クラウゼンという、ゾルゲ諜報団の無線

技士がつかまって、1942年に尋問された記録の中に、証拠がありました。これは、みすず書房の『現代史資料 ゾルゲ事件（四）』という資料集の280頁に収録されています。



《1937年（昭和12年）月日不詳、日本陸軍は戦争に備える謀略戦術として、ハルピン市またはその付近にコレラ・バクテリウム等の細菌研究所を設け、盛んに培養し居れり。右は当時ゾルゲ宅で、同人とシュタインと話しているのを聞きましたが、私（クラウゼン）はその時暗号内容が解らぬ時代でありましたから、打電したか如何かは確実ではありません。》

これは、1937年の何月何日かは分からない話です。こういうのが出てきた。実は、ゾルゲ事件研究は、戦後すぐから長い伝統があり数百の著作・論文がありますけれども、これは、ゾルゲ事件研究の人たちが見逃していた記録です。

しかし、731部隊研究家の方が指摘していました。その人は、731部隊を長く研究している近藤昭二さんというテレビディレクターで、ルポルタージュをいっぱい書いたジャーナリストです。彼がゾルゲ事件の記録の中に何か731に関係あるものはないかと探して、ようやく見つけたものです。私は、半年前に近藤さんから直接教わったのですが、こういう文書記録があった（シェルダン・H・ハリス、近藤昭二訳『死の工場』柏書房、1999年、訳注48頁、注225）。外国人の研究では、ロバート・ワイマント『ゾルゲ・引き裂かれたスパイ』（西木正明訳、新潮社、1996年）の159-160頁、注26にも出てきます。

つまり、ゾルゲは1937年に、731部隊という名前

もまだ付いてない頃（731 と付けたのは 1941 年以降です）、加茂部隊とか東郷部隊とか呼ばれていた段階で、すでにこの情報を持っていた。731 部隊の本拠地がハルビン郊外の平房に建設されるのは、1938 年以降です。その前に、すでに知っていた。

石井部隊が給水で活躍するノモンハン事件は、1939 年です。その 2 年前ということになります。恐らく外国に日本の細菌戦準備が知られたものとしては、最も早い情報になります。

ちなみに米軍は、1941 年末に太平洋戦争が始まってから、「どうも日本は細菌戦をやろうとしている」という情報をつかんで、戦後になって初めて本格的に 731 部隊の調査を始めます。

ゾルゲの得た細菌戦情報の情報源の謎

そうすると、この情報は、戦後にソ連がシベリア抑留者の中から 731 部隊の関係者を戦犯としてピックアップする戦犯捜査、あるいは 1949 年末のハバロフスク細菌戦裁判でも使われたのではないかと調べて始めたのですが、実際にゾルゲ情報が使われた形跡はありません。

ソ連が消滅した後のロシアから今までに、ゾルゲが日本からモスクワに送った電報が約 200 通出てきた。全部で 400 通ぐらいと言われてはいますが、その中の 200 通が既に公表されています。しかし、その中には 731 関連情報は入っていません。これからひょっとしたら出てくるかも知れませんが、731 情報がモスクワまで送られてスターリンがそれを読んだかどうかは、まだ分からない段階です。

それにしても、こういう会話が合ったということは事実です。そうすると、どうしてそんな情報をゾルゲは得たのか。それからなぜ日本軍の憲兵隊ないし特高警察はそれを無視したのだろうかという話になるわけです。

ゾルゲの仲間のギュンター・シュタインは、英国の新聞記者で、Economist などの特派員、1938 年には日本から離れています。そのため、ゾルゲ事件では「積極的同調者」として名前は挙げられましたが、捕まっ

ていません。したがって、日本の特高警察や憲兵隊が調べようと思っても、もう手の届くところにはないから、調べても無駄だということで、この証言だけで終わり、追跡されなかった可能性があります。

それにしても、この 731 情報はどこから来たのか。その情報源の問題が、ゾルゲ事件の新しい謎の一つになります。

ゾルゲは一体どこからこういう軍事情報を得ていたのかといいますと、確かに一つは仲間の外国人特派員、ギュンター・シュタインたちです。

けれども、その他の可能性もあります。彼はドイツ大使館の顧問、駐日ドイツ大使オットの助言者でした。日本の 731 部隊の関係者も、石井四郎以下ドイツ留学経験者が多い。ドイツとの同盟関係が非常に強い。戦争前から、ナチスドイツは細菌戦の研究をやっていたので、ドイツ大使館から取った情報という可能性もある。

それから日本陸軍の関係者も、実はゾルゲを信頼していました。武藤章、馬奈木敬信、山縣有光らいわゆる親独派の将校たちは、ゾルゲがドイツ大使館の顧問ということから、進んでドイツの軍事情報と日本の情報のやりとりをしていましたから、「日本軍も、細菌戦を準備しているよ」というようなことを、ゾルゲにもらしたかもしれない。

中国大陸の中国共産党の情報の可能性もある。ゾルゲは日本に赴任する前に 1930 年から 32 年末までは上海で活動し、のちに中国首相となる周恩来とも連絡していましたので、中国筋から情報を得たかもしれない。

それから、尾崎秀実はもともと朝日新聞上海特派員で、退社後満鉄の有力な調査部員となりました。また、近衛内閣の中国問題のブレーンで、有識者が組織した朝飯会のメンバーでしたので、そちらのルートかもしれない。

つまり、情報源についてはいろんな可能性があるのですけれども、私は、これが京都大学医学部から出たのではないかと考えて、その筋を追いかけています。

なぜ京都大学かといいますと、731 部隊の医師、隊

長の石井四郎以下有力幹部は、京都大学医学部卒が多いのです。もっと正確に言いますと、旧制四高、金沢ですけれども、旧制四高の理科から京大医学部というルートが、実は石井四郎以下 731 部隊の有力な幹部の供給源でした。

また、石井四郎が京大校長の娘と結婚し、731 部隊の部下たちを育てていた時代に、京都大学医学部にいた医学生のなかに、安田徳太郎という、ゾルゲ事件の被告の一人がいるのです。

安田徳太郎ルート？

安田徳太郎は、731 部隊に関係したわけではなくて、その反対です。山本宣治という、京都で河上肇らと一緒にになって共産党系の無産者運動とか産児制限運動とか、貧しい人々のための運動をやっていた人の従弟でした。

それで、宮城與徳というゾルゲ事件の被告の一人か



ら頼まれて、安田徳太郎自身がゾルゲ諜報団に情報を流していたことは、これは裁判記録にもあるわけです。

その安田徳太郎が、京大医学部の同窓会の一員です。ちょうど彼

が卒業した 1924 年の 2 年前に石井四郎が卒業しています。それから、731 部隊の中心になっている医師達は、大体 1930 年（昭和 5 年）前後の京大医学部の卒業生です。つまり、先輩と後輩の両方に、731 部隊関係者がいっぱいいるのです。

京大医学部卒も、別に全員が悪い人ではありません。むしろ京都で活動し右翼に暗殺された山本宣治の伝統を汲んで、京大医学部が戦争協力するのを遺憾に思った医師もいますから、そういう人たちから、安田に情報が流れた可能性はある。

あるいは、安田徳太郎は 1937 年頃は、東京の青山に診療所を持っています。優れた医者だったために、

青山ですので、市ヶ谷に近く、軍の関係者も来るわけです。陸軍の将校なんかは、病院で診療を受けながら「俺は満洲に行ってこんなことをやってきた」なんていう話をする可能性もある。こういう問題から追いかけていくと、この安田徳太郎ルートというのが、ゾルゲの報告中に 731 部隊が入った情報源になる可能性が見えてきました。

ただし、この 731 情報が本当にモスクワに届いて、実際にソ連に役に立ったかどうかは、まだ全く分かっていない。こういう謎が、ゾルゲ事件にしる、731 部隊にしる、いっぱいあります。本日はそれをいくつか並べることで、むしろそれらが繋がってくる可能性を探ってみるといふ、謎解きの話になります。

3 731部隊の免責・復権と二木秀雄

関東軍防疫給水部

731 部隊のことは、御存じの方も多と思います。関東軍防疫給水部といいまして、1937 年頃は、まだ 731 とは名付けられていません。ハルビン郊外の平房に 6 キロ四方といひますから、大変に巨大な軍事實験棟をつくりました。

そこに抗日運動をやった中国人、ロシア人の捕虜を憲兵隊が「マルタ」と称して平房に連れてきて（「特移」といひます）、伝染病の研究という名目で、生体実験をしたのです。一番ひどいので有名なのは凍傷実験ですが、日本軍の兵士の寒季の被害を少なくするために役立つとして「零下 40 度ではどうなる、零下 30 度だとどうなる」と、屋内外で実験し、殺していった。

もう一つの研究が、ペストとかコレラとか炭疽菌とかを、蚤とネズミを使って培養しました。それを陶器の筒に入れた爆弾にして、実際に 1941 年から 42 年にかけて、中国大陸の寧波とか浙江省とかでばらまいた。そういう記録が、冷戦崩壊以降に中国側からいっぱい出てきて、今では 731 博物館がハルビン郊外の平房跡地にできるまでになっています。

その実態は、陸軍の中でも、トップクラスでしか知られていない。昭和天皇が知っていたかどうかについて

では諸説があるのですけれども、岩波ブックレット『731部隊と天皇・陸軍中央』（1995年）で、中央大学の吉見義明教授らが証明したところによると、細菌戦については軍の記録にも載っていて、おそらく参謀本部および統帥権を持つ天皇も知っていたであろうと、日本側資料にも裏付けが出ている。



データを提供した医者たちとその後

しかしながら、石井中将らは、極東国際軍事裁判では訴追されませんでした。人体実験のデータ、細菌基礎研究のデータを全部米軍に提供することによって、いわば司法取引で免訴になる。

しかも、そのデータは、これは証拠を掴むのは大変なのですけれども、朝鮮戦争、ベトナム戦争の枯葉剤、そしてひょっとしたら今でも、イラクや中東で使われている生物化学兵器のもとになったのではないかと、言われています。

石井四郎は戦後隠遁するのですけれど、実際にそのデータを提供した医師たち、石井以外の731関係者たちは、日本の医学界で偉くなっていく。その一端が表舞台に出たのは、1980年代の薬害エイズ事件です。「ミドリ十字」という会社に、旧日本軍の731関係者が集まっていて、そこで血漿剤が作られていた。それが731の研究を基にしたものであると分かってくる。

石井四郎は、ノモンハン事件の年、つまり1939年に、防疫給水部の防疫というよりも給水、つまり川の汚い水をろ過してきれいな飲み水にして、日本軍に供給する、その仕組みをつくったということで天皇から感状をもらい、表彰されます。

当時の東京大学と同じ規模の予算が、満州の平房

731部隊に与えられ、医師および技師・技術者、それから少年兵も含めて約3000人が働いていた、大きな工房がつけられます。

中国側の告発と細菌戦裁判

中国側の試算では、この731部隊による犠牲者が約3万人、と今のところなっている。南京大虐殺と同じように、正確な数は分かりません。先ほど言ったように、731部隊の被害の全容は、最大の被害者である中国側の告発で、最近明らかになってきました。

1999年、つまり20世紀の終わりに、中国の細菌戦被害者および家族が、日本で731部隊細菌戦国家賠償請求訴訟を起こし、2002年の東京地裁判決では、細菌兵器が実際に使われ約1万人が被害を受けたこと、それがハーグ陸戦条約違反であったことは、判決でも認められました。

ただし、従軍慰安婦問題とおなじで、それを国家賠償するかどうかについてはこれは認められない、つまり、中国との平和条約のときに決着している、と。正に日韓基本条約によって、従軍慰安婦問題もすでに国家間の関係としては解決をしている。それと同じだとなっているのです。

判決ではここまで出ましたけれども、日本政府は、これまで関東軍が細菌戦・人体実験をやったという事実そのものを、認めていません。しかし、米国やロシア、中国からは、どんどん資料が出てきているのが、今日の731部隊研究の状況です。

731結核班長二木秀雄という人物

その中の、先ほど言った二木秀雄という人物ですけれども、731部隊で石井四郎の側近で、青年将校でした。

1908年生まれですので、石井四郎より15歳ぐらい下ですけれども、当時30代の医師で、中堅幹部・青年将校ととってもいい。実際の人体実験とか、細菌戦をやったのは、ほとんどがこの世代、1910年前後の生まれの連中です。

そればかりではなくて、彼は、四高から金沢医大卒

業で、その金沢医大の先生が谷友次という、京大に行った石井四郎の四高での同級生です。つまり、自分の先生が石井四郎の同級生で、その先生のもとで医学博士になり、石井四郎の部隊に推薦され派遣されたという関係で、731 部隊総務部企画課長でした。

731 部隊は、約3000人の膨大な組織ですけれど、総務部企画課というのは、関東軍の参謀本部と作戦を調整する部署です。軍人と非常に近い関係にあったのです。

それから彼は、第一部結核班長になっています。正確に言うと、結核および梅毒の基礎研究担当班長。彼の金沢医大での卒業論文は、梅毒の病原体であるスピロヘータについての研究でした。

これがなぜ重要かという、戦地において日本軍の兵士たちが性病にかかる率が非常に高かった。ですからその防止策が、軍にとっては切実でした。実はその生体実験に、いわゆる慰安婦達が使われていました。これは、731 研究者の方から出されている従軍慰安婦問題です。つまり結核および梅毒での生体実験をやった張本人です。

金沢仮司令部の設営と雑誌『輿論』

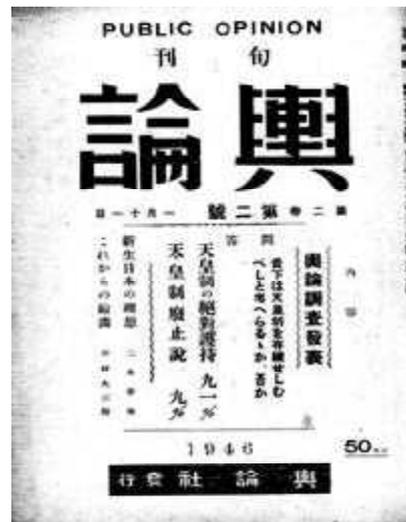
ところが、二木は敗戦後すぐに日本に戻ってきて、自分の故郷金沢で、石井四郎ら最高幹部のための仮本部の設営担当、そこからの命令を 731 部隊の部下たちに伝える連絡参謀になります。

その後、1946 年夏に『政界ジープ』という雑誌を作るのですが、その前に彼は、731 部隊の証拠隠滅をはかりながら、同時に、1945 年 11 月から金沢で輿論社という出版社を興し、『輿論』という雑誌を出していたのです。

これは話せば長くなるのですが、当時パブリックオピニオンを掲げるといのは、民主化の象徴です。「民主主義とは輿論に基づく政治である」と、巻頭言に書かれている。何をやろうとしたかという、と、「天皇をどうするかについては輿論と国民投票によって決めるべきだ。これがアメリカ型の民主主義だ」という主張

を、1945 年の 11 月、敗戦の 3 ヶ月後に、すでに雑誌に出しています。

「原子爆弾を見て天皇陛下の御聖断があったので、ようやく日本は戦争をやめることができた。したがって、天皇陛下は終戦に重要な役割を果たしたのであって、戦争犯罪とは関係がない」、「だから天皇制は守るべきである」というのが『輿論』の主張です。



もう一つ、「日本が負けた原因は、原子爆弾である」、「それは科学技術が日本は遅れていたからだ」と言います。彼は医学博士ですが、「医学者および科学者は、今こそアメリカの科学技術を学んで、

それで新しい新生日本をつくる、科学技術立国、文化立国として再生しなければならない」と主張します。こういう天皇制を擁護しながら GHQ におもねる主張を、1945 年の 11 月、日本で本格的に世論調査が始まる頃に出しているのです。

『輿論』、『政界ジープ』、『医学のとびら』

ある程度売れたのか、翌 1946 年 8 月に東京に進出して始めたのが、『政界ジープ』という時局雑誌でした。公称10万部、実際は5万部ほどで、10年間（1956 年終刊）続きます。

当時、もう一つ似たような、やっぱり10年間続いて大体5万部から10万部売っていた雑誌に『真相』がありました。これは左派のスカンダル雑誌です。

これに対抗して、



『政界ジープ』は、右派のスクandal雑誌としてGHQの意向を宣伝する、それを731部隊関係者が作っていたという関係です。

今で言えば、『週刊現代』と『週刊新潮』の違いくらいと言ったらいいでしょうか。どちらも嘘や噂を交えたいろんなゴシップ報道をやっているわけですが、普通の新聞とか『中央公論』とか『文藝春秋』には出てこないようなことが出て来るという意味で、便利な雑誌です。嘘や噂がいろいろあるが、中には真実が含まれている、貴重情報もあるという、そういうものです。

そこに目をつけて、つまり、知識人とか学者が知っていることよりも、「これからは、庶民の輿論が大切だ」、「輿論を作るにはこういう報道が必要だ」と始めたのが、この二木という男の、機を見るに敏なところ

です。そればかりではありません。彼は『輿論』と『政界ジープ』のほかに、『医学のとびら』という雑誌を出します。

この『医学のとびら』(初期は『とびら』)と言う雑誌は、厚生省医務局



監修・二木秀雄編集・発行となっています。要するに、公称10万部の時局雑誌『政界ジープ』で儲けたお金で、医師・医学生向けの雑誌を作

って、731部隊の関係者、後の金沢大学医学部長石川太刀雄とか、東京大学の緒方富雄とか、そういう人たちの論文を載せて、医学界の中にも彼は食い込んでいく。

その雑誌『医学のとびら』の後ろの方は、ほとんどが薬品会社と医療機器会社の広告です。あとは銀行・保険会社などです。要するに、厚生省や医薬業界に取

り入ってお金を儲け、それで731部隊の供養塔や731の幹部同窓会「精魂会」をつくったのです。

ついでにいえば、1949年に、厚生省・文部省・労働省・日教組後援、「若き人々におくる性生活展」というのを、二木秀雄が主宰し、浅草の松屋で開いています。「これは真面目な、若い人に対する性教育の場だ」と謳っていますが、その目玉に「高橋お伝」の展示があります。明治時代の女性犯罪者の局部標本を展示するというのが売りです。

この辺の詳細は省略いたしますけれども、これが『政



お伝の陰部の標本が公開された『性生活展』の広告

界ジープ』に出ました「明治の毒婦、高橋お伝の標本を展示します」という松屋の性生活展の広告です。

これが大いに受けて、しかも何故か文部省と日教組の両方が後援している。そういうことで官界・政界にも食い入るとい、時代の流れに敏感な、調子のいい男でした。

それと並行して、厚生省医務局の『医学のとびら』を出して、医学界・医薬産業に彼は食い込んでいくのです。

しかも、ジープ社からはそれまで単行本はほとんど出していなかったのですが、朝鮮戦争の始まる1950年に突然、なぜか1年で400冊も企画出版しています。相当の元手が必要だったはずですが。その中には、『アメリカ留学ノート』など米軍御用達のもの、『私は、毛沢東の女秘書でした』などという、いわゆる反共ものがあります。そういう出版社の社長が、二木秀雄なのです。

PHW サムズ准将の731部隊出身者登用

ここで注意すべきは、731部隊の隠蔽・免責・復権と、GHQのPHW(公衆衛生保険局)、特にその最高指導者サムズ准将との関係です。

731 部隊の調査・免責に、直接にはマッカーサーは関係していないようですが、G2 の情報将官ウィロビー将軍は、確実に関わっています。もう一人、GHQ・PHW のサムス准将の役割が要注意です。つまり占領軍の公衆衛生福祉局、Public Health and Welfare Section (PHW) と言いますが、この部門が、二木秀雄その他 731 医学関係者が、GHQ に食い込み復権する入り口の一つです。

戦後すぐ連合軍が占領にやってきた日本は、伝染病が蔓延し、結核も死亡率一位で、不衛生な国でした。米軍は、何も日本人の健康のために PHW を置いたわけではない。占領する20万人近い米軍兵士の健康と生命を守るために、まずは日本人の伝染病・感染症を退治しなくちゃいけない。それで、「DDT 革命」をやりまして、蚊をなくし、結核の予防接種、赤痢その他を日本からなくす衛生政策を実行しました。

サムス准将は、米軍軍医の最高位にある人ですが、このサムス准将がやったことは、確かに生活保護をつくるとか、医療制度を改革するとか、民主化もいっぱいやっていて、今日の医学史関係の研究では、「医療民主化の父」「日本の福祉の父」と高く評価されています。

しかし、サムスのやったことは、あくまで米軍兵士の健康を守るために、伝染病をなくさなければいけない。そのために、日本人を利用する。日本の病気に詳しい医学者・医師の専門家の力を借りなくてはならない。それで、当時の日本医学の最先端だった元 731 部隊の医師たちが、動員されるのです。陸軍防疫給水部と関係の深かった東大の伝染病研究所がポイントで、そこからワクチンを作る予防衛生研究所が分かれ、現在の国立感染症研究所になっていく。

広島・長崎の原爆被害調査、ABCC 調査団も、サムス准将の指揮下にありました。これも被害が膨大ですから、アメリカ人軍医だけで、調べるわけにはいきません。日本人の医師・医学者の中でも最も優秀な人たちが、広島、長崎の現地調査に連れて行かれ、被爆者の治療はせずに医学データを取り、ワシントンに送られたのです。

この中に、731 部隊出身者が多数含まれているのです。この人たちが、PHW の指導する厚生省のさまざまな委員になり、その後の日本の医学界で偉くなっていくという関係です。マッカーサーよりは、PHW のサムス准将が、重要な役割を果たしている。

ついでに言えば、日本を占領した米軍に、第406部隊というのがありました。日本では 1946 年 5 月に横浜でスタートし、やがて丸の内の三菱ビルに移転、1956 年に厚木に移ります。この部隊は、細菌学、化学、昆虫学、寄生虫学、病理学、血清学などの研究部門を持ち、米軍将校教授 9 人、助教授 2 人、技術研究者 25 人、さらに 100 人以上の日本人研究者で構成されていました。

ここにも旧 731 部隊関係者が登用されました。その在日米軍細菌戦部隊をもとに、サムス准将は、朝鮮戦争が始まったときに、朝鮮半島でソ連が細菌戦をやっているのではないかというので、すぐにマッカーサーの命令で、朝鮮に出かけます。ただし「それは細菌戦ではなく、普通の伝染病だ」という報告をまとめる。

サムス准将というのは、竹前栄治さんが自伝を訳しています。クロフォード・F. サムス (Crawford F. Sams) 著、竹前栄治訳『GHQ サムス准将の改革—戦後日本の医療福祉政策の原点』(2007 年、桐書店) という本です。竹前さんはサムスについて、どちらかというと好意的に書いているのですが、実は、いろいろ調べると問題がある軍人です。

ちょうど CIS のポール・ラッシュが、もともと聖公会の神父として日本にやってきて、占領期には日本通の軍人として戦犯名簿を作ったりするのと同じで、あくまでも彼は、軍医として優秀であり、アメリカ軍の兵士の健康を守るために、軍務として日本人にも健康と福祉を与えたのです。

二木秀雄とサムスの直接の関係はまだ見つかっていませんが、こういう関係を見ておくことが重要です。

「日本ブラッドバンク」の設立

二木秀雄に関して重要なのは、朝鮮戦争前夜、1950 年に、内藤良一と共に血液銀行「日本ブラッドバンク」

を作ることです。

内藤良一という 731 関係者がいます。彼は京大医学部の石井四郎の後輩で、東京の陸軍軍医学校の防疫研究の責任者でした。米国に留学して英語がペラペラだったものですから、米軍と 731 部隊の間を、通訳兼免責交渉役としてつないだ男です。

同時に、内藤良一は有末精三、服部卓四郎、河辺虎四郎ら旧陸軍参謀本部にいながら、戦後すぐに今度は米軍 GHQ・G2（諜報部）のウィロビー将軍によって重用された諜報関係の人達と、つながっていました。彼らと一緒に、内藤良一は米軍との取引、つまり「データをやるから極東軍事裁判にかけな」という交渉を成し遂げるのです。

二木秀雄は、その内藤良一、および 731 部隊に医療・実験機器を納めていた日本特殊工業社長の宮本光一と三人で、「日本ブラッドバンク」という会社を作り、取締役になる。1950 年は朝鮮戦争勃発で、日本にいた米軍兵士がどんどん朝鮮に出ていく。怪我をして帰ってきた時に、輸血しなくてはいけない。その輸血剤を提供するのが、この日本ブラッドバンク、血液銀行の役割です。この会社に、社長の内藤が、元隊長の北野政次ら 731 部隊の残党を10人近く組み込み、朝鮮戦争で大儲けして、1964 年にはそれが「ミドリ十字」という名前になって、80 年代に薬害エイズを引き起こす。こういう関係になっている。



二木秀雄は、この日本ブランドバックの設立者で取締役でした。

先ほど言いましたけれども、その後 1956 年に二木

秀雄は「政界ジープ事件」という、総会屋風恐喝事件を起こしました。それで捕まって起訴され、転落する。1969 年に懲役 3 年が最高裁で確定します。

日本イスラム教団の設立・総裁に

しかし、それで町医者に戻っても、どっこい懲りないのが、この男の 731 魂です。1974 年末になると、新宿の歌舞伎町にロイヤルクリニックという、新宿区役所の筋向かいのビルに、24時間営業の病院を開業します。もともと梅毒研究の医学博士ですので、夜の女を相手にした病院で、これが大繁盛でした。しかも、そればかりではなくて、何故か患者たちをイスラム教徒にすることを始めるのです。

1974 年 12 月というのは、その年の 10 月に石油危機が起こって、それで日本に石油が来なくなって大変だった時期ですね。この二木という男は、素早いですね。時局を読むのです。「これからはアラブと結び付かなくてはいけない」ということで、自らイスラム教に入信し、石油利権に食い込みます。実際に中東を訪れ、サダム・フセインに会ったり、国際イスラム会議を東京で開いたりする。それで石油を、米国や欧州には出さないけれども日本にだけは出すという国が出てきます。自民党から重宝がられて、機関誌『自由民主』にも登場します。

日本イスラム教団の方ですが、それまでも日本のイスラム教徒は、日本ムスリム協会というのがあって、原宿にちゃんとしたモスクがあるのです。そこで彼も洗礼を受けた上で、自分の教団、日本イスラム教団を作り、自ら総裁となった。それで、患者の夜の女たちを、最大時、自称 5 万人を教徒にして、独自の大乘イスラム教の教団を名乗った。

この話は、やりだすともうキリがないほど面白いのですが、時間の関係で詳しくは申し上げませんが、要するに、この三つの雑誌、『輿論』『政界ジープ』『医学のとびら』がポイントで、実質的に 731 部隊免責・復権の環境作り、広報誌的役割を果たし、731 部隊元隊員の慰霊塔や、「精魂会」という旧幹部を再結集する同窓会の土台となるのです。

医学的成果の米軍への売り込み

まとめますと、二木秀雄はもともと、梅毒研究の医学博士だった。彼は、731 部隊企画課長として、関東軍との連絡を仕事とした。同時に、結核・梅毒班の班長で人体実験も実行する。金沢では、その隠蔽工作に携わるが、その後は GHQ に取り入って、実験データ提供で取引して、免責になる。

米軍に関東軍防疫給水部が知られていると分かたら、今度は、人体実験をしたことと、細菌（ペスト菌）を実際にばらまいたことだけは言わない。その代わり、ちゃんとした基礎的科学的研究・医学研究をやっていたということを米軍に売り込む。科学の成果、医学的データを売ろうとする。これが石井四郎と 731 部隊の、戦後生き残り戦略でした。

その交渉の中心になったのが内藤良一で、それに二木秀雄がくっつく。『輿論』という雑誌を出して、占領軍におもねる。日本医学の成果として積極的に米軍にデータを売り込んで、免責から復権を遂げる。その黒幕に亀井貫一郎という政治家がいたのですが、今回は省略します。

それに合わせて、彼の出している時局雑誌『政界ジープ』の論調も、米軍には一貫して忠実なのですが、丁度「逆コース」の時代が変わっていく。当初の民主化・科学技術立国から、ゾルゲ事件は赤色スパイ事件だったとか、朝鮮戦争でペスト蚤を使うべきだというふうに変っていくのです。

左派系雑誌『真相』との731論戦

それから次の話との関係で、もう一言だけいっておきます。先ほどいいましたように、1949 年末に、ソ連が 731 部隊の関係者をハバロフスク裁判で裁きます。極東国際軍事裁判で連合国軍としては裁かなかったけれど、ソ連が独自に細菌戦を告発して暴いた裁判がありました。

この時に、左派のバクロ雑誌『真相』1950 年 4 月号は、「日本の軍隊はこんなひどいことをやっていた。ソ連の裁判でそれがちゃんと証明された」と特集する

のです。二木秀雄の写真までつけて、「この男は今でこそ『政界ジープ』という雑誌を出し、出版社の社長をやっているけれど、実は、731 部隊の軍医で、『実験で猿を解剖したことがある』と言っているけれど、その猿というのは実は人間だ」とか、そういう記事を出します。

それに対して、『政界ジープ』50 年 4 月号は、「いや、ソ連で行われた裁判は全部でっち上げで、架空の話である」と報じます。そればかりではなくて、朝鮮戦争が始まると、細菌戦は現代の戦争では重要なものである、細菌戦研究は今こそ役立つ、と『政界ジープ』誌上で主張し、開き直る。



どういうことかといえますと、当時原爆が第三次世界大戦の中心になると言われていました。1949 年秋にソ連の原爆実験も成功し、朝鮮戦争でも使われるのではないかというわけでは

ありません。ソ連軍は一応介入しないことになって

いましたが、中共軍は参戦しました。そこで、二木秀雄は、これからの第三次世界大戦は、大都市では確かに米ソ核戦争になる、しかし「都市での原爆爆撃ではせいぜい数十万人しか殺すことは出来ない」。朝鮮半島や中国大陸では、もっと有効な武器がある。草原とか山の中ではゲリラ戦になり、細菌戦が有効だ、というのです。

「地球の上に蚤が降る」という記事が、『政界ジープ』52 年 4 月号に載ります。『真相』が報じた第二次世界大戦での日本の細菌戦はソ連製デマだが、第三次世界大戦の今こそ細菌戦が必要だ、これからの戦争は、都市での原爆戦と農村での細菌ゲリラ戦の組み合わせになる、こういう主張をはっきり述べるようになります。

『政界ジープ』の記者たちは総会屋へ

そのあと二木秀雄は、石川県で米軍内灘射撃場誘致が争点の 54 年参議院選挙に出て惨敗したりするのですが、それは省略して、「政界ジープ事件」、スキャンダラスな恐喝事件の話を、ちょっと補足します。

二木秀雄が社長の『政界ジープ』という雑誌は、もちろん彼一人で書いていたわけではありません。いろんな記者たちがいます。この記者たちの中に、編集長の久保俊広がいました。彼は旧陸軍中野学校の出身でした。これは山本武利先生に中野学校の同窓会名簿で調べてもらって、確かめました。

この雑誌の編集部には、731 部隊の出身者と共に、陸軍中野学校出身者、元大陸浪人とか、特務機関関係者が入っていました。この人たちは、記者ですから一応取材はします。しかし、取材してそのまま記事になるとは限りません。取材した「特ダネ」やスキャンダラルは、載らない場合もあります。「これ載せるけれど、いい」って、当時の大会社や銀行の総務あたりに持っていくのでしょうか。「この雑誌を何部引き取れ」とか、露骨にカネをせびる。これが、いわゆる出版系総会屋の始まりです。

事実、『政界ジープ』出身の記者たちはその後、例えば小野田修二は『月刊ペン』に、本田二郎という記者は、平和相銀事件の小宮山英蔵の秘書になります。大橋一隆は、東京電力の広報担当になり、マスコミ関係者を接待する。2011 年 3 月 11 日の福島原発事故勃発時に、東電の勝俣会長は北京にいて、何故かマスコミの幹部たちと中国旅行中でした。そんな企業とメディアの癒着の起源が、実はこの『政界ジープ』にあったのです。そういう手法が、この『政界ジープ』という雑誌を通じてマニュアル化され、受け継がれていった。社長の二木は起訴され有罪になりましたが、部下の『政界ジープ』記者たちは、裏世界で生き残る。雑誌そのものは 1956 年に廃刊になりますが、731 部隊は、総会屋の**ばっこ**をうながすことになるのです。

二木の大乗イスラムとは？

二木秀雄の石油危機にあわせたイスラム教入信ですが、彼が総裁の日本イスラム教団の教義が面白い。「大乗イスラム」と言っていますが、どういうものかというのと、「アラーの他に神はなし」「ムハンマド（マホメット）は預言者である」、この 2 つの呪文さえ覚えて暗唱できれば、誰もがイスラム教徒になれる。こういう教えです。

要するに「難しいことではない」「とにかく、アラーを信じれば、お前はイスラム教徒だ」といって、それまでのコーランの教義を覚えなければいけないような日本ムスリム協会に対抗し、信徒を増やす。

しかし、本当の狙いは、実は石油利権でした。財界



・官界とは裏世界で繋がっていますから、アラブ産油国から莫大な利益を獲得するのに役立ちました。自民党に近い雑誌『自由

』1981 年 7 月号に「イスラム復権への私見—日本人ムスリムとして考える」という論説を書く。元 731 部隊、恐喝事件被告の前歴は隠して、「自分は日本の真のイスラム教の代表だ。おれはサダム・フセインに会って来た」という話を、堂々と一般雑誌に書くようになる。

『悪魔の飽食』発刊以降

ちょうどこの 1981 年に、推理作家森村誠一の『悪魔の飽食』が出て、ベストセラーになります。1981 年は、731 研究では重要な年です。『悪魔の飽食』が出て、ほぼ同時に神奈川大学教授常石敬一さんの学術書『消えた細菌戦部隊 関東軍第 731 部隊』が出ます。1981 年、アメリカでも、公文書開示に基づくジョン・パウエル論文から、731 部隊研究が始まります。

ちょうど二木秀雄が日本イスラム教団の総裁として脚光を浴びたところで、731 部隊での経歴が暴露され

る。森村誠一の本にも、二木秀雄の名前は出てきます。ただし、本人はすべてのインタビューを拒否したようです。新宿の病院まで森村さんは行ったらしいのですが、残念ながら何の証言も取れなかったとのこと。

4 シベリア抑留—近衛文隆の死の謎

さて、ゾルゲ事件や 731 部隊の問題が、一体どういうふうにしベリア抑留とつながっているかを調べてきて、今日ここでお話するのは、近衛文麿の息子文隆についてです。

近衛文麿は、ゾルゲ事件が起こった時の総理大臣で、ゾルゲの逮捕された 1941 年 10 月 18 日に東条内閣に代わって、すぐに日米戦争が始まる。近衛は大政翼賛会を設立し、大東亜共栄圏建設を掲げ、日独伊三国軍事同盟や日ソ中立条約を締結した、現代史の重要な政治家です。

近衛文隆の抑留死に米軍が注目

その長男に、近衛文隆という男がいました。五撰家筆頭、公爵家の跡取りですが、彼は終戦のときは軍人で、1945 年 8 月に、当時のソ連と満州国の国境近く図們の部隊に配属されていました。砲兵中尉なのですが、そこで捕まって抑留されます。

シベリア抑留者はおおむね 1950 年までに帰ってくるのですが、何故かその後も引き留められます。軍事捕虜 (prisoners of war, POW) ではなく、戦犯 (war criminal) 扱いだったのです。ソ連で捕まった日本軍戦犯というのは、普通将官クラスで、1950 年代に 50 歳から 60 歳台の人、または憲兵隊や特務機関員が多いのですが、彼は 1915 年生まれで、まだ 30 代なのに、何故か 1951 年末に戦犯に指定され、服役しました。

先ほど言った 731 部隊についてのソ連の 1949 年末ハバロフスク裁判の被告達も、戦犯として受刑していました。1956 年秋の日ソ国交回復の頃は、近衛文隆と同じイヴァノヴォ収容所に入れられていました。

そのことを、米軍が注目していました。731 部隊と、

この近衛の息子が、一体どのように結びつくかを監視していた記録を、2015 年の夏休みに米国国立公文書館で見つけてきたので、以下はそのことをお話しします。

シベリア抑留の基本的な性格

旧ソ連のシベリア抑留については、膨大な記録・回想・研究がありますけれども、「抑留 internment」という言葉を使っているのは、実は日本だけです。基本的には POW、つまり prisoner s of war (戦争捕虜) または軍事捕虜というのが、ソ連はもとより米国やドイツの扱いです。

その基本的性格は、私は奴隷労働力として留め置かれたということだと思っております。旧ソ連のスターリン粛清とシベリア抑留の関連を研究しているのですが、分かり易いのは、ソルジェニーツインの『収容所群島』という本です。その中に「収容所地図」が出てきます。1930 年代に粛清されたロシア人たちが如何に収容所で苦しい目にあったかが、地図で描かれています。

その地図と、日本の抑留帰りの人達で作った、日本人はこんな所に抑留されていたという記録を重ね合わせますと、場所はほとんど同じで重なります。つまり、1930 年代にソ連がスターリンの反対者を抑圧するために作った収容所を改装・増築する形で、日本人捕虜の収容所も作られたことが分かります。

日本では忘れられがちですが、戦争捕虜が一番多いのは、ドイツです。ドイツは 1941 年からソ連と戦争をやっていたわけですから。しかもドイツは、ソ連軍の兵士 300 万人以上を、ナチスの収容所で強制労働に使っていた。それに対する報復として、スターリンはドイツ人 240 万人を捕虜にして収容所に入れた。日本人の 6 倍です。その他にもハンガリー人 50 万人。中国人も 1 万 2 千人、朝鮮人も 8 千人ぐらいいました。これは、元朝日新聞記者の白井久也さんの本『検証 シベリア抑留』(平凡社新書、2010 年) からですが、24 カ国で 420 万人が軍事捕虜、いわゆる抑留者なのです。ドイツ人・ハンガリー人捕虜はウラル以西に多く、日

本人はウラル以東が多いのですが、厳密でなく重なります。

従って、日本人抑留者の回想や手記を見ると、大体収容所には日本人だけではなくて、ドイツ人や他の国の人達もいたと記録されている。抑留問題を考えるには、実はドイツと日本の比較が重要なのですが、これは本日の主題ではありませんので、省略します。

収容所に残された戦犯と近衛文隆

いわゆる抑留者、戦争捕虜の扱いは、日本もドイツも同じで、ほぼ 1950 年までに帰国できました。つまり、本来ポツダム宣言で条件が整い次第祖国に帰すとされていた人たちを、ソ連は 3 年から 5 年引き伸ばして、戦後復興のための奴隷労働力にしていたのです。

連合国の一員としては、帰国させなければならない。ただし、戦犯、戦争犯罪に問われた人たちは、別です。これは犯罪者ですので、そのまま留め置かれます。その数が、1955 年で日本人が 2378 人いたということになっています。

アルハンゲリスキーというロシア人の書いた『プリンス近衛殺人事件』（新潮社、2000 年）という本によれば、その中で目立つのは、将官 24 人、関東軍の大将とかそういう人達とともに、元首相の息子の若い近衛文隆と一緒にいた、と出てくる。

この人たちは、鳩山内閣で 56 年 10 月に日ソ交渉がまとまって、ようやく日本が国連に加盟できる時に、最高矯正労働 25 年だったのですけれども、恩赦という形で帰って来る。ですから基本的に戦犯であった人も、その後何人かは残るのですが、56 年 12 月までに日本に帰国することになる。その最後の帰還予定者リストには、近衛文麿の息子文隆も入っていたのです。

米陸軍によるスパイ摘発の Stitch (縫い物) 作戦

このシベリア抑留でよく知られているのは、日本人捕虜はドイツ人捕虜と同じように反ファッショ委員会を作って、抑留地の収容所で民主運動をやり、その一環として、『日本新聞』を配布して「これからは共産主義の時代だ」と宣伝して、ソ連と共産主義に対して

忠誠を誓いました。ソ連側は、ダモイ、つまり早期帰国を餌にして日本人捕虜に「日本に帰ったら、ソ連に対して忠誠を誓い、ソ連側から何らかの要請があったらそれに従います」「スターリン万歳」と忠誠の誓約をさせた。皆早く帰りたいので、先を争って誓約を行って帰国した人達があります。

中には、帰国船で舞鶴港に上陸の際、デモして（隊



列を組み) そのまま日本共産党本部（東京・代々木）に向かった例もありました。シベリア帰りの板垣征四郎陸軍大将の息子

は、戦犯だった父に反発して共産党に入ったりしました。1949 年がピークですが、そういうことは、よく知られています。

同時にアメリカ側も、それを知って警戒しています。日本を占領しているのは、基本的には GHQ の米国軍です。米国軍人たちが、帰国船がやってくる舞鶴と函館に出かけて、日本に上陸する前に最初に接見する。

GHQ の日系二世など CIC (対敵諜報部隊) 兵士が面接官で、そこで尋問を受ける。「お前はソ連でどんなことをやってきたか」、「ソ連側から何らかの働きかけがなかったか」、「働きかけに対してどうしたか、どう応えたか」、それでポリグラフ (嘘発見器) まで使って、スパイであるかどうかをチェックする。シベリア抑留からの帰国者が、最初にやられたのは米国側のスパイ尋問でした。

そこでちょっとでもソ連で「働きかけられた」と答えると、アメリカ軍は、それで捕まえるのではないのです。「よし、分かった。今度ソ連から話があったら、ぜひ俺のところに連絡してくれ」という。要するに、今度はソ連側の情報をとる二重スパイにする。これが米軍の狙いです。

そういう形の尋問が、組織的に行われました。これは実はドイツでも同じで、数十万人の尋問記録が残さ

れアメリカに送られました。Project Stitch (縫い物作戦)というのですが、ソ連スパイの摘発と、二重スパイ作りが目的の作戦だったのです。

米空軍の Wringer (絞り)作戦による地図作り

もう一つ、アメリカ空軍が主導した作戦があります。米軍尋問を受けた回想・自伝はいっぱいあります。慶応大学の小熊英二さんは、抑留者であったお父さんの聞き取りをして『生きて帰ってきた男』という岩波新書(2015年)を出しました。それら多くの記録にも出てきますが、幸い生きて帰国した途端に、尋問を舞鶴で受けただけではなくて、故郷に帰って家族と再会できてほっとしたところで、また呼び出され、尋問されたという例があります。県庁所在地の CIC 事務所に呼ばれることが多いのですが、こちらは米陸軍ではなくて、空軍の作戦です。これもドイツと同じで、Project Wringer (絞り作戦)といいます。

そこで何を聞かれるかという、「お前がソ連から声をかけられたのは分かっている。それは、誰にも言わないからね」と言いながら、何を聞きだすかという、「お前のいた収容所のすぐそばに港はあったか、飛行場はあったか、大きな目印になる建物は何か」等々と聞くわけです。政治的なことはほとんど聞かないで、地理情報を詳しく聞き出すのです。時には地図や見取り図をスケッチさせたりしました。



米国国立公文書館には、ドイツ人数十万人、日本人も1万人近くの聞き取り記録が残されています。この人たちからの聴取を、私は「人間 GPS」と言っている

のですが、その人たちの証言を重ね合わせていくと、ソ連と中国大陆と朝鮮半島の立体的な地図が出来上がるのです。

その専門のセクションが、GHQ の G2 に地理課、ジオグラフィカル・セクションというのがある。有末精三、服部卓四郎、河辺虎四郎ら旧参謀本部の情報将校が使われ戦犯容疑者・公職追放・政治情報が分析され再軍備の拠点となった G2 歴史課についてはある程度知られていますが、G2 地理課の方はほとんど、知られていません。

産経新聞(2010年11月25日)に「GHQ 傘下に山崎機関、旧日本軍将校が戦略地図作成」というスクープが載ったのがほとんど唯一の報道です。警視庁公安部の作ったラストボロフ事件の極秘資料には、エージェントと目された36人の日本人中に、菅原道太郎と志位正二が GHQ 地理課で地図作りに携わった、と出てきます。

米国にとっては極めて重要で、何をやるかという、次の第三次世界戦争の戦略爆撃の候補地はここだ、潜水艦がここまで潜れるのはこの湾のどこまでだ、といったデータを集めていた。答える日本人帰還者の方は、何に使われるかは知らないで、「今日はあんまり政治のことは聞かれないで、収容所の周りの景色だけだったよ」などと家族にも言う。それが G2 地理課から米国に送られて、ペンタゴンの白地図の中に一つ一つ書き込まれていく。

こういうことがやられていたのが、大体 1948 年から 52 年、朝鮮戦争の時が最高潮です。つまり、シベリア抑留帰還者は、ドイツ人捕虜に準じて、米陸軍・空軍の対ソ作戦、第三次世界大戦準備に本人の知らないうちに協力させられたのです。

戦争捕虜補償、ドイツと日本の相違

ただし、西ドイツの場合は 1954 年に、旧戦争捕虜ドイツ人の補償に関する法律という国内法ができました。帰還者は、政府と米軍の立ち会いのもとで、日本でやられたような尋問を受けたのですが、それがそのまま戦後の国家補償に結びつきました。ソ連で軍事捕

虜になったのはドイツ軍兵士としてですから、その間は労働期間として認めるということで、西ドイツ国家に補償された。

ところが、何故か日本では、シベリア抑留帰還者の人達は帰ってきたら、「あいつはアカになったのではないか」と疑われて、近所で陰口される、就職もうまくいかないという目に遭わされるわけです。本来は、日本政府が国として認めて補償しなければならなかったのですけれども、それがなされたのは、なんと5年前の2010年です。

戦後強制抑留者にかかわる特別措置法、シベリア特措法というのが作られます。これは2010年に、まだ生きている旧シベリア抑留者の人たち、もう80歳から90歳の人達です。この人たちに対して抑留期間に応じて25万円から150万円を一時金で支払うという法律ができて、ようやく、シベリア抑留帰還者の人達は、いわば市民権を得るかたちになる。ドイツに比べれば、非常に厳しい扱いでした。

科学者・技術者の特別扱い

戦争捕虜全体の中で、大きな例外になったのが、科学者・技術者たちです。これについては、第二次世界大戦の終結時に、原爆づくりのマンハッタン計画のなかに、米英軍が他国の科学技術情報を収集するアルゴスという特別部隊の作戦がありました。これは、ドイツの原爆開発の状況を探ると共に、最新軍事情報、例えばV-2ロケットとか、潜水艦Uボートとか、そういうアメリカにとって喉から手が出るような技術と技術者を、ドイツから奪う、ソ連が入ってくる前に米英が獲得するという秘密作戦です。(アルゴス作戦)

その代わり、貴重な軍事科学情報を提供したものは免責、つまり戦犯に訴追しない。それどころか、米国に連れて行って贅沢な研究環境のもとで、好きな研究をやらせて、それを自国のために役立てる。こういう作戦が、すでに始まっていました。

しかも、ドイツは1945年4月末には敗戦が決まり、ヒトラーは自殺する。米国は、この作戦をどういう名目で続けたかという点、ドイツは敗れた、しかし、

日本はまだ残っている。日本との最終戦争に勝利するためには、ドイツの高度な軍事技術が必要である。日本軍の技術は、大体ドイツの影響で作られている。これらを口実にして、ドイツ人の科学者・技術者1600人を米国に連れて行った。

この人達は、戦犯にならないで、むしろその後の核開発、それからV-2ロケットの延長でのミサイル開発に携わります。生物化学兵器、細菌戦技術の開発にも使われて、朝鮮戦争やベトナム戦争で実戦に使われる。CIAの管轄で、これを「ペーパークリップ作戦」といいます。もともとすぐれた科学者・技術者には、ユダヤ人が多い。だから米国に亡命した方がいい。ドイツの本国に戻らないで、そういう研究開発を仕事にする。ヒトラーのためにV-2ロケットを開発したブラウン博士は、米国に渡って「ミサイルの父」「宇宙開発の父」になります。

同じようなことを、当時のソ連も狙っていました。ドイツ人捕虜の中の科学者・技術者は、ソ連の原爆開発に動員されました。カザフスタン等々の秘密都市で使われた記録も見つかっています。危険なウラン採掘にも、軍事捕虜が使われました。

私は、731部隊、石井四郎や二木秀雄ら人体実験・細菌戦を行った医師たちの極東軍事裁判不訴追・免責も、大きくは米ソの科学者・技術者争奪戦の一環だったと考えています。

以上をまとめると、米軍の抑留帰還者に対する作戦には二つあって、一つは、陸軍のProject Stitch(縫い物作戦)。もう一つは、「人間GPS」というべき空軍のProject Wringer(絞り作戦)です。日本占領では、G2ウィロビー將軍傘下の歴史課、キャノン機関のスパイ摘発・二重スパイ育成はよく知られていますが、G2地理課でソ連の地図を作っていたことはあまり知られていません。

第2のソルゲ・スパイ団を想定した米国

スパイ摘発のProject Stitch(縫い物作戦)の成果は、元時事通信ワシントン支局長の名越健郎さん(現・拓殖大学教授)が、私より早くその総括記録を調べ

て、概要を割り出しました。米国国立公文書館の記録によると、ソ連スパイ352人が舞鶴での尋問で見つかり、うち138人が自分はソ連に対して忠誠を誓ってきたと告白し、そのうち32人は、実際に帰国後にソ連から働きかけを受けた、と挙げられています。(名越「GHQ 全土でソ連スパイ狩り」、『時事解説』2001年10月9日)

そして1950年代になりますと、米国側は、抑留帰還者の尋問記録に基づいて、日本には「第2のゾルゲ・スパイ団」があるとみなすようになる。つまりソ連は、戦時中のゾルゲ・尾崎よりももっと大きなスパイ団を日本でつくっている、と考えて、実際約200人の容疑者の名前を挙げて、「伊藤雅夫」という樺太出身の抑留者を中心としたスパイ団がある、とでっち上げようとした。

これについては、2014年秋、第8回ゾルゲ事件国際シンポジウム(東京)で私が報告しましたので、省略いたします。(加藤哲郎『戦後ゾルゲ団』『第2のゾルゲ事件』の謀略?—米国陸軍情報部1953年『伊藤雅夫とその仲間たち』ファイルから、『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』第42号、2015年、所収)

ハバロフスク裁判からラストボロフ事件へ

ソ連の抑留者工作・諜報活動が実際に明るみに出たのは、「ラストボロフ事件」です。1954年2月に、在日ソ連大使館員でKGBのラストボロフが、米中央情報局(CIA)の手引きでアメリカ大使館に逃げ込み、そのまま米国に亡命した事件がありました。

そのときラストボロフというソ連のKGBスパイ(国家保安委員会所属)が明らかにしたのは、「日本人エージェントを少なくとも36人使っていた」ということで、この36人の名前と経歴・活動が、警視庁公安部の極秘報告(1969年)に入っています。その半数近くが、シベリア抑留帰りでした。

ラストボロフの証言にもとづくその報告書を元に、三好徹、松本清張、檜山良昭と、3人もの推理作家が、ラストボロフ事件について小説を書いています。

この元KGB諜報員ラストボロフのCIAに対する証

言によって、高茂礼茂、庄司宏、日暮信則、志位正二と、外務省の役人の中に4人ものソ連スパイがいたことが明らかになった。しかし、証拠不十分で、大体皆不起訴となる。日暮は取り調べ中に、警視庁の窓から飛び込んで自殺するというので、うやむやになってしまう。しかし、捜査記録そのものは残されているのです。

こういうスパイ合戦を調べていきますと、一つは先ほどの、49年末にソ連で行われた731部隊についてのハバロフスク裁判が重要です。これは当時、ソ連の告発は、極東委員会で米英により拒否される。当時のソ連のやり方も問題です。「日本人はこんな細菌戦や人体実験をやったのだから、最高責任者の昭和天皇も戦犯だ」と、極東軍事裁判で結審した問題を、朝鮮戦争の直前に蒸し返しています。

米国や英国は、もう連合国の極東軍事裁判は終わったのだからと、それを拒否する。けれども実は、その裁判にいたる尋問記録がソ連崩壊後に出てきて、そこでの731部隊関係者の証言は、おおむね事実であったことが分かったのです。

当時、このハバロフスク裁判について報道したのは、先ほどの『政界ジープ』とか『真相』とかのバクロ雑誌です。『レポート』という当時時事通信が出していた情報雑誌の1950年3月号も、大きく特集しています。しかし、朝日、毎日、読売の大新聞には、ほとんど出てこない。米国政府とGHQが、裁判そのものをソ連のでっち上げであると否定したという話で、記事にはなっていますが小さな扱いです。

ですから、731部隊のハバロフスク裁判については、当時は週刊誌風バクロ雑誌が一番よく書いていた。被告になったのは12人ですけれども、それが山田乙三関東軍司令官・大将、梶塚隆二軍医部長・軍医中将以下で、このうちの川島清軍医少将、柄沢十三夫軍医少佐、西俊英軍医中佐という3人の731部隊の幹部が一番詳しく供述し、その中で人体実験の模様とか、細菌爆弾の作り方、どこにどう撒いたかなどが語られていた。

今、被害者である中国側は、どこに細菌がばらまか



れ、どんな被害が出たかを調べるときに、このソ連の裁判記録、1950年にモスクワで日本語に訳された『細菌戦用兵器ノ準備及ビ使用ノ廉デ起訴サレタ元日本軍軍人ノ事件ニ関スル公判書類』を参

考にしています。

731裁判被告・柄沢十三夫医師

その詳しい供述を残した3人の中の一人、柄沢十三夫という医師が、米国側の監視対象の一人でした。柄沢十三夫は、ソ連での裁判で、日本軍の暗部を正直に全部話したわけです。しかし、医師としては、なかなか優秀で真面目な人間だったようです。

ただ、真面目な人間こそ、731部隊のようなところでは、怖いのです。例えばどういうことを言っているかといいますと、彼ではないのですが、731部隊の医師の手記を読むと、「私は、確かに憲兵隊が連れてきた抗日戦の中国人捕虜を人体実験に使った。しかし、彼らはどうせ死刑になるはずだった。その死刑になるはずだった人間を、最後に人類のために役立てるために使った」などという。つまり、「自分らは、科学技術発展のためのデータとして、マルタを使ってあげた」と堂々と語る。こういうことを真剣に話す医師が出てくるのです。

右上の写真中央が柄沢十三夫です。彼は、1949年末に矯正労働20年の判決を受けて、イヴァノヴォというソ連の収容所に入っていたのです。1956年10月19日、鳩山首相とソ連のブルガーニン首相の間でようやく共同宣言がまとまり、日ソ国交回復が決まって、2ヵ月後には戦犯も恩赦で帰れると決まったそのときに、この医者は、首を吊って自殺してしまう。



その自殺の理由について、後に残された奥さんは、「自分のしたことを日本人は許してくれないと考えたからではないか」と、言っています。

しかし、米軍はそんなのは信じない。重要証言をし、ソ連軍の細菌戦に協力してノウハウを持っていたから殺された、と疑うわけです。

プリンス近衛文隆と鄭蘋如の恋？

もう一人（ようやくたどり着きました）これが、米軍にその抑留死を疑われた人物、近衛文隆です。近衛文隆について、是非皆さんに読んで頂きたいのは、西木正明さんの『夢顔さんによろしく』（初版1999年、文藝春秋）というノンフィクション風フィクションです。「最後の貴公子・近衛文隆の生涯」というサブタイトルで文庫本になっています。

それから、工藤美代子さんの『近衛家七つの謎』（PHP 研究所、2009年）も、文隆が主人公です。もう一つ、さっき挙げたロシア人アルハンゲリス



キーが書いた『プリンス近衛殺人事件』があります。

何よりも、劇団四季のミュージカル『異国の丘』をご覧になった方もいらっしゃるでしょう。このヒットミュージカルの主人公「九重秀隆」のモデルが、近衛文隆です。西木正明さんの小説が下敷きになっています。



なぜ、近衛文隆は「異国の丘」の主人公になるかと



いうと、柄沢十三夫が 1956 年 10 月 20 日に首つり自殺した時に、この死体を発見した一人が、年齢が近い若い友人であった近衛文隆で、その後、彼は 3 日間一睡も

できなかつた、とソ連側の記録に出てきます。そのまま身体を壊して、柄沢が死んだ10日後、1956 年 10 月 29 日に、近衛文隆も帰国を目前に控えて、急性腎盂炎で亡くなったと、これは 1956 年 12 月 11 日付の日本の新聞に大きく出ています。

もともと近衛文隆は、政治家志望で貴公子と呼ばれました。米国プリンストン大学に留学し、ゴルフ部の主将を務めて、全米学生ゴルフ選手権優勝という記録を持っています。身長180センチを越える大男で、丈夫で健康なスポーツマンでした。

1938 年に帰国して、第 1 次近衛内閣では、父の首

相近衛文隆の秘書を務め、さらに 39 年には、中国大陸を見て勉強しろと父にいわれて、東亜同文書院という、当時上海にありました近衛家の作った日本人・中国人学生がいる大学に学生主事として派遣されました。

そこで、中国人だが母は日本人の絶世の美女、テンピンルー（鄭蘋如）と知り合う。テンピンルーは、ハリウッド映画『ラスト・コーション』のヒロインのモデルであり、何冊か日本語の本も出ています。『異国の丘』では「宋愛玲」という名です。彼女は、父は国民党政府の高官で、中国国民党のスパイとして近衛文隆に近づいたといわれる。文隆の方はその美貌に夢中になった。それが憲兵隊に睨まれ、帰国後に徴兵されて、二等兵から再出発することになった。



日本の首相の息子近衛文隆と、蒋介石政権高等検察官の娘の鄭蘋如が、日中戦争中に仲良くなった、彼女は実は女性スパイで、文隆は「ハニートラップ」（色仕掛けの罠）にひっかかったという、悲恋話の主人公でもあります。

文隆は尾崎秀実、ゾルゲとも知り会う

これも詳しくやりだすと時間が足りませんので簡単に済ませますが、プリンス近衛文隆というのは五摂家筆頭近衛公爵家の跡取り息子です。それも政治家志望で、早くから英才教育を受ける。

ゾルゲ事件との関わりでは、プリンストン大学にいた時に、1936 年にヨセミテで太平洋調査会（IPR）の国際会議があった。そこで日本代表団の通訳・事務局手伝いとして、日本からやってきた尾崎秀実、牛場友彦、西園寺公一、つまりゾルゲ事件被告の尾崎や宮中関係者と知り合っている。

それから 1938 年に、父親の近衛首相の秘書になり、書記官長が風間章、先輩秘書が岸道三・牛場友彦ですけれども、近衛内閣囑託の尾崎やドイツ大使囑託のゾ

ルゲとも仕事やパーティで会っているわけです。

このことに西木さんや工藤さんは注目し、ゾルゲ事件と近衛親子の関係を陰謀論風に推理し論じています。しかし私は、ゾルゲ・尾崎と近衛文隆の繋がりには否定的です。

首相秘書官当時の文隆は23歳、単なる鞆持ちの書生です。プリンストンを出たと言いましたが、正確に言うと、成績が悪くてプリンストンをちゃんと卒業できなくて、ゴルフと女遊びがひどくて呼び戻され〔笑〕、帰ってきたばかりだったのです。アルハンゲリスキーの本にも、近衛文隆がロシア語学習をゾルゲから勧められたのではないかと収容所で尋問される場面がありますが、これは史料がなく、フィクションでしょう。ソ連は 1964 年まで、ゾルゲ事件について沈黙していたからです。

文隆がゾルゲ・尾崎と面識はあったのは事実でしょうが、まあ23歳の政治家見習いですから、おそらくゾルゲ団の諜報活動では相手にされない存在であったと思います。ゾルゲ事件研究の方面からすると、確かに近衛文麿・牛場友彦らは取り調べを受けていますが、文隆との関連は出てきません。

小野寺信機関での重慶工作？

しかし、翌 39 年、東亜同文書院学生主事のふれこみで赴任した近衛文隆が、上海の小野寺機関に配属されたことは、別の側面を考えさせる。小野寺信は、終戦時ストックホルムからヤルタ協定密約電を日本に送ったということで有名な陸軍の情報将校です。

近衛文麿首相は、影佐禎昭機関などが汪兆銘工作をやっていたのとは別に、なんとか蒋介石政権と直接和平交渉ができないかというので、宮崎龍介とか西園寺公一らの別ルートでも、重慶の蒋介石のところに密使を送ろうとしていた、といわれています。

その一環として、父近衛首相の了解を得て、小野寺信のもとで近衛文隆も重慶工作を試みました。相手が美しい女性で、国民党スパイと自覚したかどうかはわかりませんが、重慶政権の高官の娘（ミュージカル『異国の丘』の「蒋介石の姪」というのは、無論

フィクションです）と恋に落ち、重慶に出向く道を探った。だから鄭蕓如問題には、それなりに政治的な意味合いがあった。そのことが憲兵隊にとがめられ、後に閣議でも問題になる。

砲兵中尉のときに満州で敗戦

このまま近衛文隆を上海においておくと、必ず中国側から何か工作されて、日本にとってよからぬことになるからと、閣議でも問題にされ（『木戸幸一日記』1939年6月9日）、日本に呼び戻されて、すぐに徴兵され、中国大陆に渡った。関東軍の二等兵から、一步一步はい上がって、敗戦のときには砲兵中尉でした。

普通、中尉ぐらいでは、憲兵隊員や捕虜虐待などの実行犯でなければ、戦犯にはならないのです。しかし、近衛文麿の息子だから、政治的に利用価値がある。

終戦の前に近衛文麿は、天皇の側近として、共産革命阻止のための近衛上奏文を書き、マッカーサーには新しい憲法を作れと言われたともいわれ、重要な役割を果たしました。最後は 1945 年 12 月、戦犯に指定されて、自決する。

ソ連の忠誠工作失敗と25年の刑確定

近衛文隆は、敗戦時こうした位置にあり、それでソ連側にとっても価値があった。平たく言えば、プリンス近衛に、先ほど言った忠誠誓約をさせて、ソ連のエージェントにして日本に返し、政治家として保守政党の中でもいいから偉くなれば、ソ連にとっては長期的に極めて役に立つ。そういう目的で、各地の収容所で、いろいろな工作を受けた。その関係のソ連側の尋問調書は、アルハンゲリスキーが、ソ連崩壊後初めて近衛文隆関連のソ連側秘密資料を見つけ、『プリンス近衛殺人事件』に詳しく書いています。

ただし、それによると、近衛は頑強に「いや自分は日本人で、ソ連の手先になるわけにはいかない。ソ連との友好関係は保ちたい。しかし、それは、新しい新生日本の中でどの国に対しても我が国がとるべき道だ」というような模範解答をするものですから、ソ連側も嫌気がさして、ついに 1951 年末、朝鮮戦争の最中で

すけれども、矯正労働25年の判決を下した。

どういう罪かという、ソ連刑法58条4項、58条4



項は「国際ブルジョワジー支援」の罪で、なんでも罪になっちゃうのです。米国に留学したこと、戦犯である父の秘書であったこと、その他が「人民の敵」の反ソ・親資本家活動であるということで、25年の刑を受けてしま

う。

25年というのは、当時のソ連に死刑はなく、最高刑です。そうした最高刑・重刑の人々が、1956年、日ソ国交回復の時には、関東軍幹部や元特務機関員、731部隊関係者など、同じイヴァノヴォ収容所に入れられていたのです。

ですから、プリンス近衛は、戦犯としては山田乙三大将、秦彦三郎中將ら老人が多いイヴァノヴォ収容所で、40歳を迎えたばかりの若さで、一緒になるのです。

イヴァノヴォ収容所の3人の若い戦犯

若い収容所の被告というのは、実はもう一人いた。それが、それがさっき言った柄沢十三夫、1911年生まれで40代です。731部隊受刑者の中の若い医師で、この二人は仲良くなった。

もう一人、文隆より5歳年下の若者がいた。吉田武彦（猛彦とする文献もあります）といって、近衛文隆と収容所の中で同じ部屋で親しくなります。若い元特務機関員ということで、戦犯になっていたのです。これが怪しいと、米国側の記録に出てくる。彼は、収容所の中でいつも近衛と一緒に、部屋の中で他の関東軍将校とどんな会話をするのかを全部ソ連側に伝えるための、同獄スパイだった可能性が高い。

これは、日本でも特高警察や憲兵隊が昔よくやったのですけれど、同じ獄中に相部屋のスパイがいて、「あ

いつこんなことを言っていた」と告げ口する、そういう役割の男がいた。この三人が、計61人の戦犯が入っていて、大将3人、中將10人、少將12人など高級将校の多いイヴァノヴォ収容所の中で、相対的に若く、仲間になった可能性が高い。731部隊の受刑者であった三友一男の俘虜記が残されて、収容者リストが出ています。（『細菌戦の罪——イワノボ将官収容所虜囚記』泰流社、1987年）

そのうちの二人、つまり、731部隊の柄沢十三夫と近衛文隆が、相次いで亡くなる。1956年10月、柄沢が19日から20日の夜、つまり日ソ国交回復の日に首吊り自殺をする。その首吊り自殺をした柄沢の遺体を目撃した近衛文隆は、そこで鬱病になって眠れなくなり、10日後には一応、最終的に死因は高血圧となっていますけれども、「病気」ということで相次いで死亡した。

米軍は、これは怪しいと考えた。本当の死因は何であったのか、それが一つの謎です。米軍は「緩慢な毒殺説」を採ります。

文隆の手紙中の「夢顔さんによろしく」

もう一つの謎が、「夢顔さん」です。近衛文隆は、矯正労働25年の刑が確定したので、1952年から、日本との通信を許されるようになる。日本語新聞も読めたといいます。妻正子ら家族にあてて、近衛文隆は43通の手紙を残しています。そのうちの最後の方の8通に、変な文章が出てきます。遺族が作った『近衛文隆追悼集』に入っていますが、西木正明と工藤美代子の本にも引用されています。アルハンゲリスキーの本にも1通だけ出てきますが、彼はこの点には関心をもたない。「夢顔さんによろしく」の問題で、これが第二の謎です。

1955年5月21日の第25便以降、近衛内閣首相秘書時の先輩岸道三、牛場友彦、義理の弟細川護貞（細川首相のお父さんですね）、白洲次郎、そして広兼篤郎という満洲で新婚夫婦が世話になった人など親しい友人たちに、「そろそろ自分も帰国するから帰国準備の歓迎の計画を立てるように頼んでくれ」と、留守家族

宛に書く。そこに、それには「夢顔さんと相談するのがよかろう」、「なお岸、牛場、白洲に、西園寺のこう（公一）ちゃん等々によろしく伝えてくれ」とあるのです。

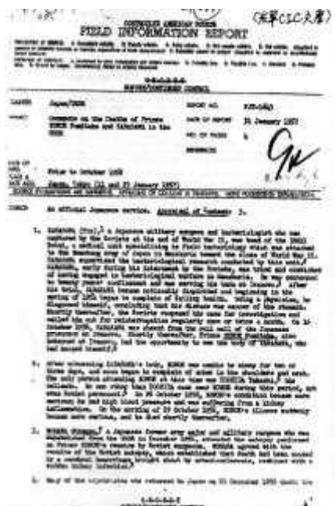
正子夫人も周知の、同年配ないし親しい友人たちの名前が出てくる中に、何故か「夢顔さん」という不思議な名が出てくる。そういう「夢顔さんによろしく」と出てくる手紙が、1955-56年に8通あるのです。（8通目は1956年9月の最後の手紙で、遺髪引き取り後に到着します）

これをネタにしタイトルにしたのが、この西木正明さんの推理小説です。「夢顔さん」というのは、留守家族の奥さんも、母親（近衛文麿は自決しましたがけれども近衛夫人は存命中）も、みんな誰も心当たりがなく、わからないのです。収容所からの手紙は、無論検閲されますから、恐らく要人で信頼できる誰かのことを、「夢顔」という名前で、家族に伝えようとしたのだろう。これは、私を含めて、読めば誰でも感じる、共通の印象です。

この「夢顔」が誰であるか。つまり、自分の歓迎会、二度目の結婚披露宴を開くさいの助言者といえますか、もっとも相談すべき人物として出てくる、この「夢顔さん」はだれなのかというのが、このあと三冊も文隆本が出てくる第二の謎なのです。

米軍「近衛文隆ファイル」を見つけて

私は、2015年の夏に、米国立公文書館で「近衛文隆ファイル」を見ていて、驚いたことがあります。「近



衛文隆ファイル」の最初の文書の冒頭から出てくるのは、近衛文隆の名前ではないのです。Karasawa（柄沢）と名前が出てくる。柄沢は、石井部隊だとあります。つまり、「731 石井部隊の柄沢十三夫という男が首をつって死

んだ。その死体を近衛文隆は目撃していた。この二人の死は、どちらも怪しいから、米軍としては検討しなければならない」という死因を疑う4頁の検討記録が出ている。これは、これまでの近衛家の研究には、出てこないものです。

父の近衛文麿、これは有名な政治家ですから、米国にも死亡診断書ほか大きなファイルがある。近衛秀麿ファイルもあります。これは文麿の弟で、クラシック音楽の指揮者です。2015年の夏にNHKが「戦火のマエストロ」という面白い番組を作りました。その元となったのが「近衛秀麿ファイル」で、やはり米国立公文書館の米軍記録の中に、秀麿がドイツで密かにユダヤ人を助けていた記録が出てきた話です。

もう一つの近衛家の記録が、この「近衛文隆ファイル」です。731部隊の柄沢十三夫の死と、同じ収容所での近衛の近接した二人の死を疑い分析した、米国陸軍情報部の記録です。柄沢が死んだときに、近衛がそれを見てショックを受け、それで心身がおかしくなって彼は病死したといわれるのですが、その死因を疑っています。

二人の近接死と死因の謎

西木正明さんの『夢顔さんによろしく』では、柄沢の名前が「唐津」とされていますけれども、この死が近衛文隆とはほぼ同時であることは書いてある。片方（柄沢）は自殺、片方（文隆）は病死となっているが、ひょっとしたら同じ死因ではないかというのが、米軍の推論で、西木さんも毒殺説を書いています。

米軍記録では、文隆の最後を看取った重要人物が、何人かいるといえます。

一人はもちろん、収容所のソ連側の医者です。しかし、日本人の731部隊関係者も医師で、文隆と同じ収容所の同じ大部屋にいるわけです。その中に、西俊英軍医という、ハバロフスク裁判で18年の判決を受けた受刑者が、野原清水という軍医と共に、二人の最後の看取り役でした。731部隊教育部長だった優秀な医師ですから、もちろん診療も治療もでき、薬も処方できるわけです。

それから、近衛文隆の親友と称する、吉田武彦という若者です。彼は、おそらくソ連側に通じた監視人ですが、いつも文隆と一緒にしたから、彼も毒を盛ったり、騙して薬物を飲ませることが、できるわけです。

一番あり得る可能性と米軍が見たのは、精神を錯乱する特殊な薬物です。元 KGB のラストボロフが、ちょうどこの頃米国に亡命していて、マッカーシズムのさなかのアメリカ議会非米活動調査委員会で聴取を受けています。そこで、近衛文隆は普通の戦犯ではない、彼は政治的 목적で残され工作されているのだ、と話す。それから、ソ連の収容所では、薬物を少しずつ与えながら、長期的に証拠を残さず殺してしまう緩慢な殺人が行われていた、と証言します。「精神安定剤とか何とか言いながら飲ませて、躁鬱病そううつにして、静かに殺すのはよく知られていることだ」と証言するのです。これは当時、日本の新聞でも簡単に紹介されています(「スパイを拒否して死に追い込まれた近衛文隆氏、ラストボロフ氏米国で証言」『毎日新聞』1956年12月22日)。

アメリカは、二人とも死因はそれではないかと疑う。ソ連の精神病棟で使われていた薬です。文隆はもう11年も収容されていましたから、ずっと少しずつ与えられていた可能性もある。解剖しても痕跡が残らず、死因がわからない、そういう薬だったのではないかという謎です。

ですから、近衛文隆の死因については病気という公式説とは別に、殺人説がある。殺されたとすれば、ソ連の担当医が処方したのではないかと疑われる。

それから、先ほどの 731 部隊の医者がいます。特に最後の数日間は昼夜交代で、軍医たちが枕元で看護している。ソ連側が彼らを使って、彼ら自身の意志というよりも、ソ連軍から言い含められてか、騙されてか、何かを盛った可能性がある。

また、医者とも別に、近衛文隆が一番信頼していた吉田武彦という若い元特務機関員がいた。この吉田が、実は、収容所での近衛文隆の葬儀で、友人代表の弔辞を述べ、2ヵ月後に帰還して、遺品と言って文隆の遺髪と爪を、奥さんに舞鶴港で渡す役を果たすのです。当時の新聞にも出てくる。この男も、長期に薬を盛っ

ていた可能性がある。

こうして、いくつかの可能性はあるけれども、いずれにしる米国側は、731 軍医柄沢十三夫の死と関連して、近衛文隆は単なる病死ではなく薬物死と考えていたことが、この近衛文隆ファイルから分かります。

この点は、工藤美代子さんは 731 部隊に触れず、あまり重視していませんが、重要です。西木さんは、柄沢を「唐津」、吉田武彦を「脇田」と偽名にしつつ、一応関連を疑い毒殺説です。

アルハンゲリスキーが、この点で、旧ソ連秘密文書、近衛文隆のソ連側死亡診断書も使って説得的に毒殺説を述べています。ただし残念なことに、柄沢十三夫・西俊英が 731 部隊の軍医で、ハバロフスク細菌戦裁判で受刑中だったことには触れていません。彼はまた、もう一つの「夢顔さん」の謎には無自覚です。

西木正明の「夢顔さん=ゾルゲ」説

もう一つの大きな謎が、「夢顔さんによろしく」です。最後の死ぬ直前まで日本に帰国することを夢見て信じていた文隆は、「自分が帰国した時、披露宴をもう一回やろう」「新婚旅行はどこがいい」などと、1944年10月に結婚して1年足らずで生き別れとなった正子夫人に書いているのですが、その時に「お世話になる」「くれぐれもよろしく」と言って、おそらく親しい友達より年上の、誰かに頼っていた。その「夢顔さん」とは誰なのか、という問題です。

これについては、大きく二つの説があります。西木正明さんは「夢顔=ムガン=ゾルゲ」説です。

西木さんのこの小説はよくできていて、柄沢(731 部隊の関係者)と同じ時期に近衛が死んだという話も、毒殺の疑いも、一応出てくる。けれどもその関係を、米軍ほどには厳しく見ていない。



それで、西木さんの「夢顔さん」の推理は、当時ソ連との国交回復の交渉中だったことに着目します。ソ連に対して働きかけるには、ソ連に近くて影響力のある人物に頼めば、ひょっとしたら自分の帰国は早くなるのではないかと考えたのだろう、というのが西木さんの推理です。それに一番いい人物は、リヒアルト・ゾルゲ、つまりソ連のスパイだと文隆も認識している元ドイツ大使館嘱託ではないか、と推理します。

けれども、ゾルゲは尾崎秀実と共に戦時中に日本で死刑になっている。そこで西木さんは、尾崎秀実とゾルゲが1944年11月に死刑が執行されたことを、近衛文隆は満州の前線に派遣されていて知らず、その後もそのままシベリア抑留の収容所生活なので知らなかったのではないかと、ゾルゲはまだ生きていて、ゾルゲに頼めばうまくいくと考えたのではないかと、というのが、この『夢顔さんによろしく』での推理です。

その場合、どういう筋で「夢顔＝ムガン」となるかということ、「ムガン高原でゾルゲは生まれて、彼の幼少期のアダ名はムガンだった」と、これは西園寺公一が風見章に語った話にするのです。

これは、小説としては面白いですが、話がうますぎて、史実としては根拠が乏しい。彼が生まれたアゼルバイジャンのバクーという町は、ムガン高原に近いといっても、500キロぐらいあります。彼が幼い頃にムガンというアダ名があったということもありません。この部分は、小説としてはよくできているけれども、史実としては認められません。工藤美代子さんも、西木説のこの点を強く批判しています。

工藤美代子の「夢顔＝高松宮」説

それより相対的に説得力のあるのは、工藤美代子さんの説です。『近衛家七つの謎』で、当時、昭和天皇のことを「龍顔」つまり、ドラゴン・フェイスと呼んでいた。『木戸幸一日記』にも出てくる。だから、「夢顔」というのは「龍顔」に近い、しかし天皇ではない皇室の誰かではないか、というのが工藤さんのアイデアです。

その説でいきますと、天皇の弟高松宮は、近衛文麿

と一緒に終戦直前に和平工作を行っている。吉田茂なんかを使って英国に働きかけようとした。文隆にとっても、近い存在だった。要するに「親父は、皇室の中でも特に高松宮を信頼していた。だから、高松宮にすべてうまくいくように取り図ってくれ」というメッセージだということ。天皇がドラゴン・フェイスであれば、高松宮がドリム・フェイスではないかというのが工藤説です。

工藤さんは、この「夢顔」について、近衛家の遺族にもいろいろ聞き取りをしたのですが確定できず、「この部分は私の想像です」と断っていて、全体はノンフィクションですが、その部分だけはフィクションと認めている。けれども、少なくとも「ムガン＝ゾルゲ」説、つまり、西木さんの小説よりは合理的な推論で、うまくできている（笑）。



私の「媒酌人＝木戸幸一」説？

家族・親族も知らないし、牛場友彦、岸道三、細川護貞、犬養健、白洲次郎、西園寺公一ら友人たちにもわからなかったのが、「夢顔さん」です。この「夢顔」については、1955-56年の8通の文隆の手紙にしか残っていません。「ムガン」と読むか「ユメガオ」なのかも、分からない。当の近衛文隆は、待望の帰国を目前にして、死んでしまった。

ですから、永遠の謎です。逆にいえば、抑留中の文隆からの40数通の手紙に実名が出てこない重要人物のなかで、幾らでも推理はできるわけです。極端に言えば、ゾルゲの死刑をソ連の収容所で知らなかったのな

らば、尾崎秀実が敗戦後の日本でソ連を救った英雄にされていたという想定も成り立ちうるのです。近衛首相秘書時の書記官長だった風見章や、文麿の親友で大政翼賛会組織部長だった後藤隆之助でもいい。上海時代の関係から、小野寺信や中山優でも有資格者になります。

それで、私の説は（笑い）敢えて「夢顔＝木戸幸一」



説ということにしておきます。どういうことかと言いますと、木戸幸一は、もともと近衛と同じ皇室側近で、戦時の1944年10月に、近衛文麿が正子夫人（京都西本願寺大谷家の娘で皇太后の姪）と結婚したときの、媒酌人・仲人です。

つまり、近衛文麿と木戸幸一は、（原田熊雄と共に）学習院高等部から京大という学生時代からの親友で、若いときから家族ぐるみで行き来していました。近衛公爵家の跡取りの結婚には、当時、内大臣で昭和天皇に一番近かった侯爵木戸幸一が、媒酌人をしているのです。当時ですから、仲人なら妻に万事相談せよというのは当然で、私はその可能性があると思うのです。

結婚式には出席できなかった父と媒酌人

ただし、米国や上海で女性問題でつまづいた近衛文麿が観念して、戦時中の1944年10月に皇后の姪と見合結婚するにあたって、ハルビンの結婚式には、父近衛文麿も媒酌人木戸幸一も政務で忙しく、二人とも列席していません。

西木正明さんの小説では、父の近衛公は出席できず、母と秘書で文隆の親友の岸道三・牛場友彦が満州に出かけて式を準備し、そこに10月10日に木戸幸一内大臣夫妻が飛行機でハルビンまでかけつけた。関東軍の軍人やハルビン総領事が列席した挙式を無事終えて、

「つつがなく媒酌人の任を果たした木戸は、文隆にまつわるこれまでのあれこれを知っているせいか、心の底からうれしそうだった」と、見てきたような嘘を書いています。

これが、推理小説の強味であり、弱味です。つまりこんな虚構は、『木戸幸一日記』にあたれば、たちまち崩れるのです。

確かに1944年6月24日の『木戸日記』には、サイパン島の戦鬪さなかですが、「近衛公嗣子文隆氏と大谷光明氏令嬢と婚約整い媒酌人を依頼せられたところ、本日結納取交につき、二時、鶴子同伴、公爵邸を訪問、慶びを述ぶ」とあり、媒酌人だったのは事実です。

ただし結婚式当日、10月12日は、ハルビンではなく東京にいて、「近衛公を訪ひ、本日ハルビンにて結婚式を挙げる文隆君の為に慶びを延ぶ」と、荻窪の近衛邸を訪問しただけで、結婚式には出ていません。しかも、戦局は厳しいですから、「尚、重臣の取扱い方針等について相談し」と、花婿の父と媒酌人は政治的仕事を一緒にしています。

この点で、西木さんの『夢顔さんによろしく』は、全体から史実とフィクションを注意深く読み分けなければいけません。結婚式の場面は虚構です。また、新婚の文隆・正子夫妻にとって、媒酌人の木戸幸一は気軽に相談できる相手であったかどうか問題になります。私は工藤美代子さんの言う宮中の高松宮よりは、相談しやすい関係だと思います。だから「夢顔＝木戸幸一説」は、論理的には成り立ちます。

この説を補強すると、第一に、「夢顔さん」が出てくる1955年5月21日付け第25便から1956年9月23日第42便までの8通の手紙は、すべて短かった新婚生活で離別した妻正子をいたわり、帰国歓迎会、披露宴のやり直し、新婚旅行など、帰国できたら本当の夫婦になれるという文脈で、「夢顔さんによろしく」と出てくることです。結婚式・披露宴をもう一度やろうというなら、当時の日本の貴族社会の伝統からしても、まずは媒酌人・仲人に相談せよというのは自然ではないでしょうか。

近衛文隆が1945年に尋問された家系

でも、それならわざわざ「夢顔」などと謎かけせず、なぜ木戸の名前を出さないのかという問題が出てきます。もちろん父文麿の戦犯指定・自決をソ連でも文隆は知っていますから、木戸も戦犯になったとは考えていたでしょう。いうまでもなく、ソ連の収容所から日本の家族宛の手紙はソ連側に検閲されます。私はこの点で、「夢顔＝木戸幸一説」を補強する資料を、アルハンゲルスキーがソ連で見つけた近衛文隆の尋問記録から示そうと思います。

近衛文麿は、1945年8月からたびたびソ連軍の尋問を受け、ツァーリ時代から悪名高いルビヤンカ（ソ連治安機関所在地の地名）やアレクサンドロフスク監獄など10数ヵ所の収容所（ラーゲリ）・監獄を経て、ようやく1956年6月に、比較的待遇のいい高級将校向けのイヴァノヴォ収容所に移ります。

それが終の棲家になりましたが、ソ連での最初期の尋問は、国防人民委員部防諜隊として知られる、悪名高いスメルシ（スパイ取締まりのためのソ連軍特殊機関）沿海州支部の1945年12月4日付の記録にまとめられています。アルハンゲリスキーの本で初めて公開された、貴重な記録です。そこで最初に聞かれている重要事項が、彼の結婚式と列席者のことです。

最初に英語力、学歴・職歴・軍歴を聞かれたうえで、「結婚はいつであったか、夫人の社会的地位はいかなるものか」と、問われます。文隆が1944年10月、ハルビンで昭和天皇の姪と挙式したと答えます。すると尋問官は、満州国皇帝溥儀と関東軍司令官山田乙三大将の名前を挙げて、その結婚式に出席したかどうかを聞きます。文隆が「出席するはずはありません。あちらは国家元首で当方はただの将校です」「1944年10月の軍事情勢では華美な式典は許されませんでした」と、事実通りに答えます。

そこから兄弟姉妹と爵位の話になり、「父が死亡するか60歳になると嫡男に爵位が譲られる」と答えたところから、父文隆の秘書官の仕事の詳細な説明を求められ、その政治的活動が、1951年12月26日のソ連

刑法第58条4項、「国際ブルジョアジー支援」の「対ソ敵対行動」による禁固25年の罪状になります。最終的にはソ連崩壊後、1991年に無罪だったとして名誉回復され、1997年10月16日に名誉回復証明書が遺族に渡されますが。

この1945年12月4日の近衛文隆のスメルシ尋問は、まだ12月16日の父・文麿の戦犯容疑・自決の前で、華族制度が新憲法発布前で生きていた時代の、ソ連側の日本国家観が反映されているように思われます。

皇室をロマノフ王朝になぞらえた？

つまり、日本の天皇制をロシア革命前のツァーリ制になぞらえ、ロマノフ王朝のような世襲貴族制にダブらせて、近衛家を天皇家に近い貴族の一員、そのプリンスとして近衛文隆を扱う方向が、すでに敗戦直後に定められていたようです。だからこそ政治的利用価値があり、ソ連への忠誠誓約が執拗に求められたのでしょう。

そのさいに、貴族同士の結婚式とは、上流社会の華やかな通過儀礼で、スメルシの尋問は、その列席者から、重要度を測ろうとしたものでしょう。そこで媒酌人について聞かれなかったのは、文隆にとっては、ある意味で幸いでした。

ただし、「個人的につきあいのあった廷臣あるいは閣員はだれか」という問いに、「父の内閣の閣僚であり父の親友であった木戸幸一とは親交がありました。よくわが家へ来ました」と答えている。文隆にとって、父の友人の中で最も信頼できるのは、やはり木戸幸一だったのだらうと思われ（以上は、アルハンゲリスキー、42頁以下）。

しかし、私のこの「夢顔＝媒酌人＝木戸幸一」説も、フィクションにならざるを得ません。というのは、木戸幸一は、近衛文麿の自決と一緒に1945年12月に戦犯として検挙され、極東国際軍事裁判（東京裁判）のA級戦犯でした。終身刑の判決を受けている。

彼が、病気を理由に巣鴨から釈放されるのは（岸信介や児玉誉士夫はもっと早く出ていますが）、1955年10月です。それまで彼は、巣鴨に入れられたままです。

「夢顔さん」の初出する手紙の 1955 年 5 月よりも後になります。

近衛文隆が、父の戦犯訴追・自決を知りながら、木戸が戦犯を免かれたと思っていたとは考えにくいところ。獄中の木戸に相談せよと妻・母に述べるのは、西木さんのゾルゲと相談せよと同じくらいに奇妙でしょう。

文隆がどれだけ知っていたかどうかは分かりませんが、近衛家と木戸幸一の間には、敗戦時のある種の確執があります。一つは木戸が昭和天皇側近としてあくまで昭和天皇を守ろうとしたのに対して、近衛は天皇退位論、皇太子への譲位と摂政に高松宮を唱えていたという問題です。

日米戦争回避、早期和平のために尽くしたと自分では考えていた近衛文麿の戦犯訴追自体、木戸家の縁戚である都留重人が集めた情報をハーバード・ノーマン（カナダの外交官で日本研究家。著書に『日本における近代国家の成立』）がまとめた GHQ の報告書が決定的意味を持ったという説もあります。

その他、年齢では若干上になる木戸の、近衛の世間的名声に対するジェラシー説まであり、木戸と疎遠になった近衛家の人々が、1955 年の文隆の手紙の「夢顔さん」を木戸幸一とは考えなかつたらう、とも思われます。

近衛文麿と木戸幸一の敗戦時の確執

ですから、近衛文隆が、11年もソ連の収容所・監獄をたらい回しにされている間に、いったいどれだけ戦後日本の事情を知り、情報を持っていたのか。木戸幸一が父と同じく戦犯にされたことぐらひは、多分知っていた可能性があるのですが、死刑か終身刑か、まだ獄中にいるかどうか、釈放されたかどうかは分かっていない段階で、1955 年 5 月 21 日付手紙から「夢顔さん」が出てくる。そこで果たして、媒酌人木戸幸一が「夢顔さんによろしく」の「夢顔さん」になり得るかどうかという疑問は、依然残ります。

さらに言えば、風見章、つまり、第一次近衛内閣の書記官長も、有力な候補者です。親しい岸道三や牛場

友彦の上司で父の側近です。風見の名も手紙に出てこないで、「夢顔さん」になりうる。

彼は戦後社会党の代議士になって、日ソ交流にも熱



心で、実際 1958 年に妻文子が近衛文隆の遺骨を日本に引き取る時には、重要な仲介役を果たすわけです。

彼もいわば有資格者ですが、戦後の風見のことを、文隆がどれだけ知っていたか、1944 年の婚約・結婚には関与していませんから、「夢顔さん」とするには難があります。

もっとも、近衛文麿の収容所からの手紙は、43通のうち27通しか公開されていませんから、この可能性も、あえなく消えるかもしれません。これはやはり、推理小説向きの謎のようです。

歴史的事件の現代性

こういう謎がいっぱい出てくるのが、ゾルゲ事件・731 部隊・シベリア抑留の研究世界です。

こういう事件の現代性といえますか、ある大きな事件は、歴史の記憶の中で絶えず作り変えられ、それで、我々が自分の作った物語で納得するのだけれど、それでは納得できないような証拠・史実が新たに出てくると、別の物語を作らなくてははいけない。

これが、戦争の記憶であり、私の言う情報戦です。それが外交の場では、もっと厳しくなり、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の拠出金を出すか出さないかという問題にまで広がってくる。

以上が、今日の私の話でございます。ご清聴ありがとうございました。[完]

